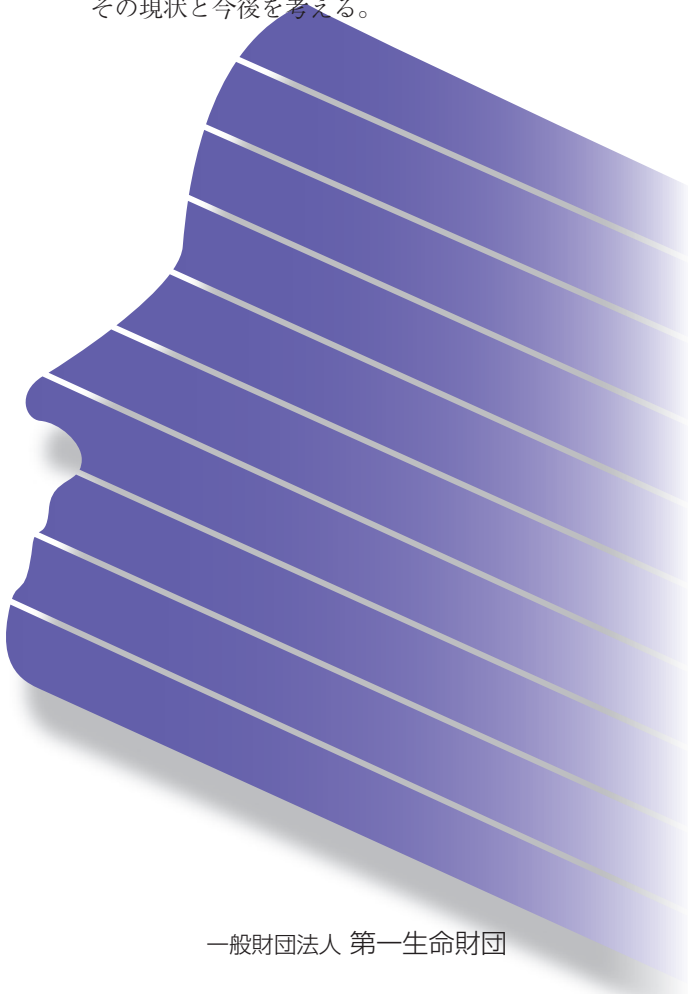


コミュニティ—— *Community*

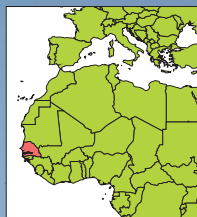
●特集—— **農業と障がい者福祉** 2025 | NO. **175**

農業と福祉をつなげる
農福連携が広がりつつある。
その現状と今後を考える。



アフリカ大陸最西端の街・ダカル ～セネガル

写真・文 岩崎えり奈 ◆ いわさきえりな



シェイク・アンタ・ジョップ大学
キャンパスの広場を歩く学生たち
ダカルは、西アフリカにおける商業・政治の中心地であるとともに、シェイク・アンタ・ジョップ大学や様々な博物館、巨大な現代的建造物にみられるように、文化と教育の中心でもある。シェイク・アンタ・ジョップ大学は、1957年にフランスの植民地支配下で総合大学として設立され、フランスから独立後のセネガルを率いた知識人であり政治家でもあったシェイク・アンタ・ジョップにちなんで1988年にダカル大学から改名された。

セネガルの首都ダカルはアフリカ大陸の最西端、大西洋につきでたカップ・ヴェール（緑の岬）に位置する。ダカールの名は、「そこに住む者には平和がおとずれる」「逃れる土地」を意味する現地語がフランス語に訛ったとされる。元々は小さな漁村であったが、15世紀にポルトガル人が到達して以後、交易拠点として発展したのは、岬の半島部という地の利が良かったためであろう。17世紀になると、オランダ、イギリス、そしてフランスが進出し、1815年に植民地支配を開始すると、ダカル港や鉄道を建設し、都市が発展していった。1902年にはフランス領西アフリカ(AOF)の首都がサン＝ルイからダカルに移され、植民地支配の拠点となった。



ダカールの街でひときわ目立つアフリカ・ルネッサンスの像 高さ 50 メートルの像は、セネガル共和国独立 50 周年を記念して、北朝鮮の協力によって建設された。男性と女性、子供の三人一家が空を見上げる形をしていて、アフリカが人種差別から解放された長かった歴史を象徴しているようだ。



赤色がカラフルなダカール駅 19 世紀には内陸のマリのバマコとダカールを結ぶ鉄道の終着駅であった。現在は、ダカール近郊を結ぶ通勤電車（左写真）の駅として、2021 年にリニューアルされた。



植民地時代に建てられたアラブ風のケルメル市場 駅から遠くない町の中心地には、ダカールと旧フランス領西アフリカで最も古く 1862 年に建設されたケルメル市場がある。野菜や肉、魚、スパイス、民芸品など、様々な品物を売っているが、とくに目立つのが米売り場。セネガルの都市住民は米を主食とする。しかし、米の自給率は約 40% で、タイなど海外からの輸入に頼っていて、市場で売っている米もタイ米、ベトナム米の破碎米であった。



市場で売られているタイ米の破碎米 砕けて割れた米で、1950 年代に仏領インドシナから植民地セネガルに、安価な砕けた「くず米」をフランスが導入したことに由来する。この米は、セネガル料理に合うように工夫され、現在では破碎米の方が好まれるようになった。



セネガルの国民食・魚の炊き込みご飯「チェブジェン」 国民食のチェブジェン（ウォロフ語でチェブはご飯、ジェンは魚）や、チェブヤップ（ヤップは肉）ヤッサ・プレ（ウォロフ語でヤッサは玉ねぎ料理、プレはフランス語で鶏）などには、破碎米が欠かせない。



ゴレ島の栈橋を歩く地元の女性 ダカールの人々の装いは、色鮮やかだ。

ダカールから船で20分のゴレ島 ダカールの歴史を語るうえで欠かせないのが、ダカールの沖合に浮かぶ小さなゴレ島である。ゴレ島は、ピンクやイエローのカラフルな植民地時代の建物とブーゲンビリアが印象的な街並みだが、17世紀から19世紀まで、ゴレ島は内陸部から送られてくる奴隷を「出荷」する拠点であった。人類が犯した過ちを記憶にとどめるユネスコの「負の世界遺産」に1978年に登録された。



「奴隷の館」でゴレ島の歴史を語るガイドの話に聞き入る観光客
ゴレ島の中で、特に有名なのが「奴隷の家」である。その一階には、船の出航をまつ奴隷たちが収容されていた小さな部屋が並んでいる。奴隷は選別されて船に運び込まれ、アメリカ大陸やカリブ海の島々へ運ばれた。


緑と暮らす

【第7回】

都市の緑3表彰 第44回「緑の都市賞」第一生命財団賞

化女沼 2000 本桜の会

宮城県大崎市



化女沼ダム湖畔の桜
東北の桜は開花が遅い。訪問した4月上旬、多くの桜は、まだ五分咲きくらいだった。

宮城県の穀倉地帯・大崎市。中心地の住宅街を囲むように水田地帯が広がる。その平野の北端の丘陵地に化女沼ダム湖がある。化女沼は、丘陵地帯の湧水で生まれた自然湖だったが、農業用水の安定確保などを目的に、1996年にダムが完成し、周辺には公園を整備した。

この化女沼ダム湖畔とその周辺を拠点に活動する団体「化女沼2000本桜の会」が、2024年10月、公益財団法人都市緑化機構主催の「緑の都市賞」（特別協賛・一般財団法人第一生命財団）の第一生命財団賞を受賞した。

同会は、西暦2000年を記念して、「未来の子どもたちに桜の名所を残したい」と発足し、桜の植樹や維持管理、清掃活動などを続け、今年で25年目を迎えている。5万坪を超える敷地にこれまでに市民の手で3000本以上の桜を植えてきた。桜の花を長い期間楽しめるように、開花時期が異なるさまざまな品種の桜を植えているのが特徴だ。今では、県内外から多くの人が訪れる桜の名所となっている。

また、2011年の東日本大震災後には、「化女沼の桜で未来の子供たちに夢と希望を!!」の理念のもと「心の復興3ヶ年計画」を企画し、地域の小学生や園児たちと共に3年にわたって桜の植樹を行い、震災による犠牲者の追悼も行った。その後も、犠牲者を悼み、3月11日に桜を植える活動が続いている。



ヨウコウザクラ（陽光桜） 2016年、大崎市誕生10周年を記念し、「桜」を大崎市の木として制定。翌年、その制定を祝って、ヨウコウザクラ20本を化女沼ダム湖畔に植えた。ピンク色の花が咲くのが特徴の早咲きの桜。



桜につけられた名札 桜の木一つひとつに植樹に参加した人の名前をつけることで、植えた桜に愛着を持ってもらう工夫だ。毎年満開の時期に植えた桜を見に来る人もいそう。



桜の植樹をする市民たち 希望者を募り、下草刈り、ツタの除去、追肥などの環境整備活動や、ゴミ拾い、不法投棄物の撤去などの清掃活動、植樹活動などを行っている。写真は、桜の若木を植えているところ。



清掃活動を行うボランティア 会員と共に、多くの市民やボランティア、企業、団体が参加し、桜を觀賞しながら、化女沼ダム湖周辺の駐車場、周遊道路、桜の植栽地のゴミ拾いを行っている。



活動後に桜を愛でながら昼食 お昼ご飯は、活動に参加した会員たちが、和やかに交流する機会になっている。



桜を植える子どもたち 2011年に起きた東日本大震災後、「化女沼の桜で未来の子供たちに夢と希望を!!」との思いから、「心の復興3ヶ年計画」を企画。2012年から3年に渡って、地域の小学生や園児たちと共に犠牲者の冥福を祈り、桜を植えた（2012年「鎮魂の桜」60本、2013年「希望の桜」100本、2014年「夢の桜」50本）。植樹から10年以上が経った今では、お花見が楽しめるほどに生長した。



化女沼ダム湖 丘陵地帯の湧水で生まれた自然湖で、周囲が約4kmある。その名前は、美しい娘が沼の水を鏡にして化粧をしたという「化粧沼伝説」や、ある娘が蛇を産み沼に身を投げ、そこから機織りの音が聞こえるという「照夜姫伝説」に由来し、そこから化女沼と言われるようになったという。

コミュニティ——Community

2025/No.

175

一般財団法人 第一生命財団

●口絵・世界の街から

アフリカ大陸最西端の街・ダカール

～セネガル 岩崎えり奈 ————— 1

●口絵・緑と暮らす

化女沼 2000 本桜の会

————— 5

●巻頭エッセー

一〇〇年後の地方についての予言 梅崎昌裕 ————— 10

●特集

農業と障がい者福祉 ————— 13

《座談会》

農福連携をめぐる近年の取り組み ————— 14

出席者／中村隆一郎・森下博紀・中本英里・岡村毅

司会／生源寺眞一

農園型障害者雇用は農福連携か？ 村木太郎 ————— 74

●一般記事

ジェンダード・イノベーションが導く社会 相川頌子 ————— 78

人と社会がつながり直すためのテクノロジー 鳴海拓志 ————— 82

●連載

助成施設訪問

幼保連携型認定こども園たんぽぽこども園

(大阪府堺市) ————— 91

教育じろん

二つの教室、二つの風景

——私のジェンダー教育の軌跡 斎藤悦子 ————— 94

ブックレビュー

————— 97

一〇〇年後の地方についての予言

梅崎昌裕

うめざき まさひろ／東京大学大学院医学系研究科教授／『コミュニティ』編集委員



中国大陆の南側、香港とベトナムの中間あたりに、ちょうど九州くらいの大きさの海南島という場所がある。二〇〇〇年頃に、その島の内陸部に居住する^リ犁とよばれる少数民族の村で住み込みの調査をした。当時、海南島の内陸部は中国のなかでは相対的に開発の遅れた地域であり、犁の人々は水田で収穫する米と水田に生える可食雑草、カニやエビ、オタマジャクシなど水田で獲れる小動物、村の周りに生息するクマネズミなどを食べながら生活していた。現金収入源は、野生のお茶、バナナなどに限られていた。村に一台しかないテレビに映し出される上海や北京の華やかな生活をみながら、自分たちの生活がそれといかにかき離れているかを嘆くのが人々の日常であった。私からみれば、豊かな自然の中で、平和で不自由のない生活が営まれているようにみえたが、村の人は、経済的に恵まれない生活から脱却するきっかけをみつけれないかと考えていたのだと思う。

研究の一環で犁の人々の昔の様子を報告した文献を探したところ、ドイツ人探検家と日本人研究者の本がみつかった。いずれも戦前の話であり、中国が経験した戦後のさまざまな変遷（たとえば人民公社

による集団経営）を経験する前の犁の人々の生活——地主がいて、大きな鹿を狩猟し、盛んに焼畑を行うなど——を窺い知ることはおもしろかった。一番驚いたのは、この山奥の地域がさまざまな経済活動の中心だったという記述であつた。当時は立派な材木や漢方薬の材料になる野生植物は大変高価なもので、それを買付けけるための商人だけでなく、現金収入のある村人を対象にした物売りも頻繁に訪れていたようである。山奥に住むことには経済的な合理性もあつたのである。

いまや中国でもほとんどの建物はコンクリートと鉄、工業的に生産された材料で作られており、建材としての木材の重要性は大きく減少している。漢方薬はいまだにつかわれているとはいえ、医療現場における治療では化学的に合成された薬の方が圧倒的に重要である。犁の人々がどうしてそんな山奥に暮らすことになったのか、そしてどうしていまは経済的に恵まれない生活を送り、それを嘆いているのか、その歴史的な背景がわかったような気がした。

考えてみれば、日本の地方に住む人々が経験してきたことも同じである。一〇〇年単位で考えれば、現在、離島あるいは中山間地域とよばれる場所はかつて第二次産業の中心地であつた。たとえば、私の子どもの頃を過ごした五島列島は捕鯨で潤つた場所である。当時、鯨油は燃料、機械油、石鹼、化粧品などの主たる材料であり、歯や骨もさまざまな日用品に加工されていた。一〇〇〇人以上の従業員がいる大きな網元がいくつもあり、捕鯨にかかわる人々を対象にした第三次産業も盛んであつた。いまでは人口が数十人にまで減少した五島の二次離島には、かつて映画館や旅館、飲食店、捕鯨船の修理工場などさまざまな施設があり、ほかの地域からたくさんの人が働きにきていたという。その後、鯨油の役割は石油にとってかわられ、日用品もほかの材料で作られるようになった。

単純化していえば、日本の地方の直面する人口減少という問題は、この一〇〇年で第二次産業の中心

が地方から都市へと移り集約化されていったという構造的な変化を背景にしているのだろう。上記の鯨油の例にとどまらず、例えば鉄の生産（たたら製鉄）・暖房／煮炊きのための薪炭焼き、薬草採集などを担っていたのは地方のコミュニティであった。しかしその後、鉄が沿岸部の製鉄所でつくられ、薪炭の役割が化石燃料にとつてかわられ、薬草のかわりに化学合成された薬が使われるようになった。地方各地に分散していたこれらの生産は大規模な工場や集約化された工業地帯が担うようになり、第二次産業の中心は地方から都市および都市近郊に移っていった。第一次産業の生産物にしても外国から輸入されるものの割合が大きく増加してきた。このような経緯を踏まえれば地方の人口が減少傾向にあるのは仕方ないのかもしれない。

最後に大胆な予言を試みたい。地方が第三次産業の中心になる未来はないだろうか。デジタル技術は地理的に離れた場所にいる個人を結び付けることを可能にしつつある。一人一人がネットワークに接続されたデジタルデバイスを持ち、津々浦々に通信基地局が整備されたことで、遠く離れた場所にいる相手とコミュニケーションすることの障壁がなくなった。デジタル技術は産業構造を変えるだけでなく、地方のもつ経済的／社会的な価値を変えるかもしれない。また、第一次産業の盛んな地方に暮らすことは、地産地消を通じて地球環境問題の緩和にも貢献しうるだろう。夏の暑さに苦しむたびに、都市でクーラーをフル稼働させてアーバンヒートリングを深刻化させるより、涼しい夜を過ごすことのできる自然にあふれた地方に住みたいと考える人が増えるかもしれない。もし向こう一〇〇年の間に、デジタル革命と地球環境問題に誘導される構造的変化によって都市への人口偏在が解消されれば、地方にも活力が戻ることになる。乗り越えるべき課題が多いのも事実ではあるが、一〇〇年前の人が現在の私たちの置かれた状況を想像もできなかったのと同じように、これから何が起るかは誰もわからない。

特集

農業と障がい者福祉



農業と障がい者福祉

座談会

農福連携をめぐる近年の取り組み

出席者（敬称略・発言順） 肩書きは座談会開催時のもの

中村隆一郎 — なかむら・りゅういちろう／社会福祉法人白鳩会理事長

森下博紀 — もりした・ひろき／株式会社ウイズファーム代表取締役

中本英里 — なかもと・えり／農林水産政策研究所農業・農村領域主任研究官

岡村毅 — おかむら・つよし／東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チームチームリーダー

司会

生源寺眞一 — しょうげんじ・しんいち／東京大学・福島大学名誉教授、本誌編集委員

農業と福祉がつながる「農福連携」の取り組みが広まっている。また、ノウフクJASのように、「農福連携」の普及を支えるしくみができたことで、近年、関心が高まっている。障がい者や生きづらさを抱える人たち、高齢者などと地域社会は、今後どのように関わっていくのか。農福連携の取り組みを通じて、農業と福祉の未来を考える。

右から中本英里、森下博紀、中村隆一郎、岡村毅、生源寺眞一の各氏。



生源寺（司会） 今回のテーマは「農業と障がい者福祉」です。「農福連携」という言葉自体がそれほど知られているとは言いがたいところがありますので、最初に私から、今回の趣旨をご説明申し上げたいと思います。

近年、農業と福祉が結びついた農福連携の取り組みが増加しています。典型的な例でいいますと、農業の現場で障がい者が働くことによって、農業者と障がい者にウィン・ウィンのメリットが生まれて、双方が充実した満足感を得るかたちがあると思います。

政府、あるいは支援団体によるノウフクJAS^{*}の認証とかノウフクアワード^{*}の表彰もあつて、社会的な関心の高まりも感じているところでもあります。ただ、農業の現場における作業も、あるいは障がい者の働きをサポートすることも、そう簡単なことではないだろうと思います。今回、私は障がい者の問題について、さまざまな資料を読ませていただきましたが、なかなか大変だなと改めて感じています。そんな難しさもふくめて、具体的な取り組みから学ぶことを意識してまいりたいと思います。

『コミュニティ』誌はこれまでに農業を特集のテ

ノウフク



認証機関名

「ノウフクJAS」

食品や観賞用植物などの生産行程に障がい者が携わったことを示す農林規格。上の写真がその認証を証明するマークで、認証機関から認証をうけた商品などにつける。

「ノウフクアワード」

農福を実践してきた人や、その取り組みを表彰する。





生源寺眞一 氏

日本農業研究所理事・研究員、東京大学・福島大学名誉教授、本誌編集委員。

1951年愛知県生まれ。東京大学農学部を卒業後、農林水産省農事試験場・北海道農業試験場研究員、東京大学助教授・教授、名古屋大学教授、福島大学教授などを経て、2023年より現職。これまでに東京大学農学部長、福島大学食農学類長、日本農業経済学会会長、食料・農業・農村政策審議会会長などを務める。近年の著書に『日本農業の真実』（ちくま新書）、『農業と人間』（岩波現代全書）、『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる』（家の光協会）などがある。

マにしたことが何度かございます。農村の現場でがんばっている農業経営者に参加していただいたこともありました。福祉の領域についても、高齢化が進み、あるいは認知症の人々も増えていくということで、地域の介護の問題についても何度か特集が組まれています。農業も福祉も地域社会で非常に大切な役割を果たしているわけです。しかし、農業と福祉がつながった取り組みをテーマにするのは『コミュニティ』としてもはじめての試みです。みなさんの忌憚のないお話をうかがうことができれば幸いです。

つけ加えておきますと、「農福連携」の具体的な取り組みには農産物の加工、販売、あるいは林業の領域に関わるケースもふくまれていると思います。また、働く側の人材の面でも、通常の障がい者の概念にはおさまらない広がりもあると理解しております。本日の座談会で



農福連携等推進ビジョン（2024 改訂版）の概要

I 農福連携等が実現を図る社会

農福連携は、農業と福祉が連携し、障害者の農業分野での活躍を通じて、農業経営の発展とともに、障害者の自信や生きがいを創出し、社会参画を実現する取組

IV 農福連携等の推進に向けた新たなアクション

農福連携等に取り組む主体数を 12,000 以上、地域協議会に参加する市町村数を 200 以上とすることを目標とする*

* 令和 12（2030）年度までの目標

3 絆を広げる～ユニバーサル農園の拡大と「農」「福」の広がりへの発展～

- ユニバーサル農園*の普及・拡大
 - ・ユニバーサル農園の事例やノウハウを取りまとめて普及
 - ・農業での就労を目的としたユニバーサル農園の開設や施設等の整備を支援
- 社会的に支援が必要な者の農福連携等への参画の推進
 - ・ハローワーク等の関係機関が連携し、農業分野での障害者等の雇用を促進
 - ・犯罪をした者等の就農意欲喚起等に向けた農業実習等を推進

* 世代や障害の有無を超えた多様な者が
農業体験を通じて社会参画を図る農園

「高齢者の医療・介護が大きく変わる中で時代が園芸療法に追いついた」（2025 年 7 月 12 日園芸療法関係者へのセミナー資料／岡村毅作成）を参考に作成

農福連携に関わるおもな出来事

- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| 2017 年 7 月 | 「農福連携全国都道府県ネットワーク」設立 |
| 2018 年 11 月 | 「一般社団法人日本農福連携協会」設立 |
| 2019 年 4 月 | 「農福連携等推進会議」設置（農林水産省や厚生労働省などの関係省庁で構成） |
| 2019 年 3 月 | 「ノウフク JAS」規格制定 |
| 2019 年 11 月 | 「ノウフク JAS」認証第 1 号（ウィズファームなど 4 事業者） |

も、「農福連携」という言葉を使うことがあると思いますけれども、農福連携の定義や範囲については、緩やかな理解でまいるたいと考えております。よろしく願います。

それでは自己紹介から始めましょう。最初に、農福連携の現場からお越しいただいた中村さんと森下さんにお話ししたいと思います。実際の取り組みについてはのちほど詳しくお話させていただきますので、ここは簡潔に、中村さんからお願います。

中村 鹿児島の花の木農場からまいりました中村と申します。昭和43年生まれで、現在57歳になります。

出身は、鹿児島県の右下、大隅半島の南端にある南大隅町です。南大隅町は、根占町と、佐多岬がある半島の最南端の佐多町が合併してできた町です。高校は、鹿児島湾を挟んで、西側に位置する薩摩半島にある鹿児島市内の高校に進学しました。当時は実家からの通学ではなく、引越して鹿児島市内で暮らしながら通っておりました。大学時代は東京で過ごしました。大学卒業後は、2年間ほど東京でサラリーマンをしています。今は福祉関連の仕事をしています。大学でも社会人になってからも福祉を学んだり経験したりしたことはないんです。福祉とは関係がない分野で、学生時代や、社会人の駆け出し時代を過ごしてまいりました。



鹿児島県南大隅町

面積 213.59km²、総人口 5698 人（2025 年 10 月 1 日現在）。

大隅半島南部に位置する町で、日本本土最南端の佐多岬がある。ブランド魚の養殖や畜産、茶に加え、パッションフルーツ、マンゴー、ライチなどのフルーツ栽培が盛ん。

農業と福祉の連携＝農福連携

【農業・農村の課題】

＊農業労働力の確保

毎年、新規就農者と同程度の農業従事者が減少

＊荒廃農地の解消 等

再生利用可能な荒廃農地は全国で約9万ha

【福祉（障がい者等）の課題】

＊障がい者等の就労先の確保

障がい者約965万人のうち雇用施策対象となるのは約377万人、うち雇用（就労）しているのは約106万人

＊工賃の引き上げ 等

障がい者等が持てる能力を発揮し、
それぞれの特性を活かした農業生産活動に参画



【農業・農村のメリット】

＊農業労働力の確保

＊農地の維持・拡大

＊荒廃農地の防止

＊地域コミュニティの維持 等

【福祉（障がい者等）のメリット】

＊障がい者等の雇用の場の確保

＊賃金（工賃）向上

＊生きがい、リハビリ

＊一般就労のための訓練 等

「高齢者の医療・介護が大きく変わる中で時代が園芸療法に追いついた」（2025年7月12日園芸療法関係者へのセミナー資料／岡村毅作成）を参考に作成





中村隆一郎 氏

社会福祉法人白鳩会 理事長。

1968年鹿児島県生まれ。青山学院大学経済学部を卒業後、食品卸の国分株式会社（東京都中央区日本橋）に入社。1993年に社会福祉法人白鳩会に入職し、同法人「第2花の木ファーム」施設長（1998年～）を経て、2019年6月より現職。その他、鹿児島県知的障害者福祉協会副会長、日本農福連携協会理事、大隅半島ノウフクコンソーシアム会長を務める。

その後、25歳になる年に鹿児島島に戻り、両親が立ち上げた社会福祉法人に入職して、かれこれ30年ほどがたっています。

私たちの法人を両親が立ち上げたのは私が3歳の頃で、物心つくかつかないくらいの頃です。当時、母親はともかく、忙しく働く父の姿を家で見えることはほとんどないという状態でした。「いったいこの人は何をやっているのか」というようなことで、幼少期から多感な時期を両親の背中を見て過ごしました。

また、地域の方々が障がい者並びに福祉を見る目線をいろいろなところで感じていました。いまでこそ「農福連携」という言葉がとりざたされるようになり、障がい者の存在、ないしは人権が議論の対象になることが多くありますが、私が小さい頃はそういうことはあまりあ

りませんでした。世の中が右肩上がり、日本が元気のある時代には、「障がい」という概念そのものが、どちらかといったら、「かわいそう」とか、表現が適切でないことを承知のうえで申しあげますが、「社会のなかのお荷物」といった考えが、人々のなかにあったと思います。

学生時代はバブルの絶頂期でしたが、世の中の絶頂期、バブル崩壊以降は日本の停滞期で、私が福祉に足を入れてからこんにちに至るまで、福祉のなかでもいろいろな変化がございました。農福連携は福祉のなかで物事をとらえられているわけではなくて、それを取り巻く社会のパートナーシップというところで議論にあがっているということが、非常におもしろく興味深いところがあります。そのなかでハードな問題ももちろんわれわれの目の前にはあるんですが、昔は障がい者を「かわいそう」という目で見ていた認識がちよつと変わってきていて、農福連携は特にそういう部分があります。

そのあたりの変化が今日の話のなかで出るかわかりませんが、そうしたことを感じながら、両親の背中を通じて障がいのある方々とふれあってきた、法人ができて50数年がたちます。両親はまだ健在ですけども、私は父から令和元年（2019）に法人の代表を引き継ぎました。まだ駆け出しの理事長ですけども、私なりの感覚で、この法人を運営してまいりたいと思っています次第です。どうぞよろしくお願いします。

生源寺 次に森下さん、簡単に自己紹介をお願いいたします。

森下 長野県松川町にあるウィズファームからまいりました森下です。

私は昭和45年1月3日生まれで、東京都出身です。山羊座で、血液型がAB型のRhマイ



ナスということで、稀な人間だといわれています。地方公務員を17年間やりました。そのあと飲食店の経営を10年、それから障害福祉サービス事業所に勤務しています。勤務といいますが、自分たちで立ち上げて、嫁に代表になっていただいていたのはじめたんです。その途中で株式会社ウィズファームを設立しました。

現在は、嫁がやっている株式会社ひだまりの取締役をしながら、中村隆一郎さんも一緒にやつてもらっている一般社団法人日本農福連携協会の理事。それから長野県で一般社団法人クロスオーバーという農福連携の中間支援団体を立ち上げて、その代表理事をやらさせていただきます。

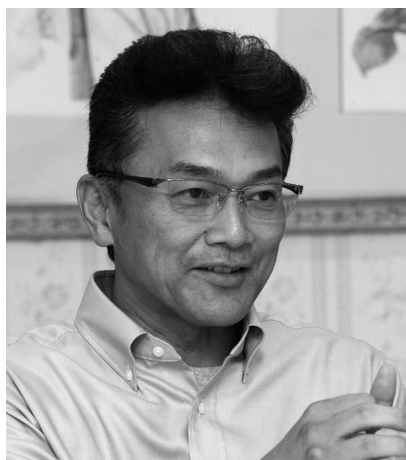
それから全国介護事業者連盟障害福祉事業部会の長野県支部長を仰せつかっております。1期2年で、3月末にはやめる予定です。それからノウフクコンソーシアム東日本の会長もさせていただいております。

父親が転勤族だったものですから、私は東京で生まれてから、幼稚園2か所、小学校2か所、中学校2か所と転校が相次いでいました。長野県はもともと母親の生まれたところだったんですが、母親が一人娘だったにもかかわらず、結婚して嫁に行ってしまったって、森下家を継ぐ人がいなかった。私は次男坊なので、「長野県の森下家を継いでみ



長野県松川町

面積 72.79km²、総人口 1万 1864人
(2025年8月1日現在)。



森下博紀 氏

株式会社ウィズファーム 代表取締役。

1970年東京都生まれ。長野県松川高等学校を卒業後、松川町役場、飲食店経営、障害福祉サービス事業所を経て、2017年より現職。

これまでに、一般社団法人日本農福連携協会理事、株式会社ひだまり取締役、一般社団法人クロスオーバー代表理事、一般社団法人全国介護事業者連盟障害福祉事業部会長長野支部長、ノウフクコンソーシアム東日本会長などを務める。

ないか」という話があつて、継ぐことになりました。この話は、とんとん拍子に進んで、中学3年の11月、中学生生活の終わりという頃に急遽転校をして、そのまま長野県の地元の高校に入つて、卒業して、地元の役場に就職しました。

東京で通っていた中学校は、当時ワルで有名な中学校でした。昔、「葬式ごっこ」というのがあつたのを覚えていますか。いじめられている生徒が学校に登校すると、机の上に菊の花と、「おまえはいいやつだった」というような色紙が置いてあつて、しかも色紙には先生まで寄せ書きするような、非常に悪い学校だったんです。私がいたときは、昔に流行った「ビー・バップ・ハイスクール」というマンガの世界で、ほかの学校とけんかをするとか、そういったイメージだったんですけれども、「葬式ごっこ」のような陰湿ないじめをするよ

うに変わってしまった。公立学校なんだけど、そんな学校でした。

そんなところで暮らしていて、「長野県に行くのはどうだ」という話があったとき、行くことに何も抵抗なかったので、「ああ、いいですよ」と行っただけです。

ただ、行ってみたらカルチャーショックを受けました。まず電車が1時間に1本しか走っていない。しかも長野県では公立中学校が電車通学の区域になっていて、私は雪道を歩くのがすごく遅いので、駅まで歩くのに、通常15分くらいなのが、25分かかってしまう。そうすると「1本後の電車に乗ることになって、着くのが1時間遅れるな」と思っていたら、電車も一緒に遅れていたというような、すごくゆつたりとした地域で、それまでの環境とがらっと変わりました。

また、役場に勤めてからも、まさか自分が農業をやるなんて思っていませんでした。でも、農業は自分自身もすごく癒されるなということで、障がいをもった方にもどんどんやってほしいという感じでやっているところがございます。今日はよろしくお願いします。

中村 電車があるだけでいいですよ(笑)。

生源寺 私はもうじき後期高齢者になる人間ですので、中村さんと森下さんは一世代下という印象があります。中本さんと岡村さんは、さらにその下の世代になるんでしょうかね。中本さんと岡村さんからも自己紹介と、現在の仕事と専門領域について、あるいは農福連携と関わりをもつようになった経緯、背景を少しお話しただけだと思います。それでは、中本さんからお願いいたします。

中本 中本英里と申します。私は農林水産政策研究所^{*}というところで研究者をやっております。

【農林水産政策研究所】

農林水産省の社会科学系の研究機関で、農林水産政策に関する調査・研究を行う研究所。



中本英里 氏

農林水産政策研究所 農業・農村領域 主任研究官。

1982年愛媛県生まれ。短大卒業後、一般企業にした後に、愛媛大学農学部に編入学。愛媛大学大学院にて農学博士取得後、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構西日本農業研究センター研究員を経て、2025年より現職。

愛媛大学在学中より、農園芸活動が有する医療・福祉的な効果に関する研究や、農福連携の研究に従事している。

ます。農林水産政策研究所には今年の4月から異動しまして、2018年から今年の3月までは、広島県の福山市で、農研機構*の西日本農業研究センターの研究者をやっておりました。私は、農福連携に関連する研究をさせていただいて、中村さん、森下さんのような先進事例を訪問させていただいていろいろなことを学ばせてもらい、それを情報整理して、一般化するということを研究の対象にしています。

私は愛媛県出身なんですけれども、愛媛大学大学院博士課程までおりまして、2011年から18年までは、「農作業等が有する医療・福祉の効果の検証に関する研究」という研究を行っていました。

どういう研究かといいますと、精神科・心療内科のクリニックに通っているひきこもりの

【農研機構】

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の略称。日本の農業や食品産業の発展のために、幅広い分野で研究開発を行う組織。全国各地に研究拠点がある。

患者さんのなかで農作業に向いているんじゃないかという方に、研究に協力していただき、市民農園とか畑とかで作業をしてもらい、どういう効果があったかを研究の対象にしています。そのクリニックの先生から、「あと一步、踏み出すことができれば社会参加できたり、仕事につけたりする方がいる。そうした方にとって発散できる場も必要で、農作業はいんじゃないか」というお話があつて、その方たちと一緒に農作業を行うことにしました。7年間この活動を行い、9人の患者さんが参加して、研究に協力してくださいました。その活動成果の一部を論文にしました。

私が一番はじめに書いた論文を、農業機械などを扱うヤンマーが行っている「ヤンマー学生懸賞論文」に応募したところ、受賞させてもらえたことがあります。そのとき、審査員をしていたのが生源寺先生でした。ですので、生源寺先生は雲の上の存在で、まさかこういう場で先生とお会いし、議論できるとは思っていなかったです。

こうした研究を十数年続けてきて、効果を検証することもすごく大事だけれども、「自分の学んでいた学問の分野で考えてみると、制度や環境の問題も重要じゃないか」と私のなかでシフトしていく時期があつて、今は、農林水産政策研究所で農福連携という分野を社会科学の視点で研究しているところです。

生源寺 今回の座談会のメンバーを検討するプロセスで、中本さんの名前を拝見して、「あれっ? どこかで見たことがあるな」という印象だったんですが、思い出すことになりました。いま中本さんは謙遜しておっしゃいましたけれども、2013年の「ヤンマー学生懸賞論文」で、じつはトップの大賞でした。大賞の中本さんと特別優秀賞の二人がすべて女性だっ



たんですね。いまお話にありましたけれども、中本さんは、対象の方と向き合って、ある意味では伴走者的なところもあったと思います。それが克明に描かれていたのです。論文は医療・福祉との連携というタイトルだったわけですが、もう10年以上前から取り組んでおられたわけで、今回座談会のかたちでお会いできること自体、私はほんとうにうれしく、ありがたいことだと思っております。

中村 「園芸療法」とか、そういった領域の研究でしょうか。

中本 そうです。

生源寺 論文のサブタイトルに「園芸療法」という言葉が使われていましたね。「園芸療法」という表現がでしたので、医療の専門家である岡村さんからもご専門のお話と、農福連携に取り組むことになった背景やきっかけについてお話をいただけますでしょうか。

岡村 私は東京都健康長寿医療センターで、精神科の医師をしています。ちよつと気楽な話からしますと、私は、寮のある鹿児島県のラ・サール学園に中高と通っていました。ラ・サールから東京に行つて、医学の道に進み、学生の際は水泳部だったんですが、福祉の話で思い出したことがあります。水泳部で普通に水泳をしているのがおもしろくなつてしまつて、ダウン症の子どもにも水泳を教える団体があつて、途中からその活動にのめりこんでんです。理事までやつて、水泳を教えていました。いまに思つて、その頃から福祉に関心があったのかななんて思っているんです。

その後、医者になつて、昔から精神医学が好きだったので精神科に進みました。医者の仕事も5年ぐらいうると、また悪いくせで、病院の外来に来る人を診るだけではおもしろくな



くなってしまうって、ホームレスの方を支援する団体が東京の山谷（台東区）^{さんや}にあつて、たまに何かの拍子にそこに出入りするようになったんです。その支援活動がおもしろくて。その研究もして、論文にしているんです。そういう感じで、新しいもの好きとか、新しいことをやりたい性格です。

私の専門は高齢者の精神医学ですが、専門に進んだのは20年ぐらい前です。当時は認知症の人は鉄格子の中に閉じ込められて、ケアどころの話じゃない。閉じ込めるのが主流だったんです。薬も、要するに暴れる人を押さえる抗精神病薬を与える。でも、なんで暴れているかというところ、「なんで閉じ込めるんだ」と暴れているわけで、どっちが先なんだという話なんです。それはちょっと違うんじゃないかなと思っていました。

介護保険のしくみが整ってきて、デイサービスもはじまって、デイサービスではみんな真面目にケアしているのは認めますが、おじいさん、おばあさんが集まって風船バレーをやつて体を動かしていたりする。本当にやつてもらふべきは、そういう活動ではないんじゃないかと思っていました。

当時、週に4日は東京でバリバリ研究をして、週に1日は風光明媚な新潟県の田舎で医療をして、のんびりやっていたんです。そうした新潟でも、患者さんたちは、ただ病院に閉じ込められて何もしていなかった。そんな過ごし方はもったいないという話になって、「田んぼで農作業をやってもらったらいいんじゃないか」となりまして、認知症の人に田んぼで作業してもらったんです。やつぱりできるんですよ。それまで杖をついて歩いていた人が、農作業をしてもらったら杖を忘れて歩いて帰ったとか、そういう話がよくあつて、みんなけっ



岡村毅 氏

東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム チームリーダー。

米国出身。2002 年、東京大学医学部を卒業し医師免許取得。東京大学大学院にて医学博士取得。精神神経学会専門医・指導医、老年精神医学会専門医・指導医、精神保健指定医の資格を持つ。

現在は東京都健康長寿医療センター研究所にて高齢者のメンタルヘルスの研究に従事する。また NPO 法人ふるさとの会の理事として、ホームレス支援に従事する。

こう楽しそうにやり始めたんです。個人的に一番興味深かったのは、そうすることでスタッフの考えかたが変わることです。看護師さんとか、ケアマネジャーさんとか、ケアをする人は、日々、真面目にケアしているんですけど、どちらかというと「どうやって管理するか」とか「暴れたらどうやって対処するか」とか、そうした話ばかりなんです。でも、一緒に農作業をすると、隣の家のおじいさんと同じなんだとか、うちのおじいさんと同じなんだなみたいな感じで、スタッフの取り組む姿勢や考えかたがどんどん変わってくる。農業をしているとケアする側の人たちも楽しそうによくしゃべります。田んぼに行っても、私なんか何もできなくて、むしろ患者さんたちのほうができたりする。患者さんにとっても非常に楽しい時間になっているんですよね。

こうした取り組みは、おもしろいと思って、農福連携をいろいろ調べていたら、当時オランダでケアファームが進んでいるらしいということを知って、ちょうど科研費*でオランダを訪れて、そのころから農業政策研究所と関わりはじめて、中本さんとも知り合っ

て、いまでも研究をしているところです。

これまでは、障がい者に対して、まわりに迷惑をかけてしまう患者さんをどうやって閉じ込めておくとか、仕事を与えてどうやってやってもらうかみたいな感じだったんですけど、これからは患者さんや障がいのある方が何をするかを選ぶ時代になると思うんです。そのときに、「私はこれをやりたい」と思ってももらえるものが必要なわけで、そういう意味では農福連携は時代の要請だと思っていますね。

ちよつと余談ですが、東京のデイサービス「ラスベガス」って聞いたことがありますか？いま流行っているカジノ型デイサービスです。デイサービスに行くとは独自の通貨があつて、その通貨を賭けて男性の高齢者が目をギラギラさせながらデイサービスで遊んでいるんですよ。みんな元気に遊んでるし、本人たちが選んでやっているんです。批判もありますので、私は賛成も反対も表明せず中立の立場ですが、一石を投じたなとは思っています。農福連携は、さすがにどこからも文句は出ないと思いますし、自然の中で健康になっていくし、医療を変

える一つの考えかたになつていくと思うんです。

「社会的処方*」ってみなさん聞いたことがあると思うんですが、これまでの医学だと、「血圧が高い」となれば、高血圧の薬を出し、「血糖値が高い」となれば糖尿病の薬を出す。年齢が上がっていくにつれて薬がどんどん増えていっちゃうんですね。イギリスでは、それ

【科研費】

科学研究費助成事業の助成金。文科省所管の日本学術振興会が行っている。

【社会的処方】

薬などの医療的アプローチに加えて、人とのつながりや地域活動への参加を支援することで、患者の孤立や健康問題を解決して、ウェルビーイングの向上を目指す取り組み。

ではよくないとなって、そもそも家に閉じこもって何もしていないから病気になっているので、お医者さんが「あなたには薬ではなくて、ダンスクラブを紹介するから、そこに行きなさい。保険で行けますよ」と勧めるんですね。そうすると健康になって、薬がいらなくなる。いま日本でも「社会的処方」をやっているという話になっていてるんです。

ただ、これにはちょっとしたからくりがあつて、じつはそんなにいい話でもないんです。イギリスのかかりつけ医は、抱えている患者さんの数でお金が入ってくるんです。治療してもしなくても入ってくるお金は同じだから、薬なんか出さなくてもいいんです。薬を出さないうで、患者さんが勝手に元気になって、病院に來ないで楽しくやつてもらえれば、病院がどんどん儲かるしくみで、とても合理的な考えかたなんですよね。

社会的処方には、そういう側面もあつて、夢のようないい話でもないんです。でも、日本でやるとなると医療制度を変えないといけないくて、実際には難しいんですね。ただ、社会的処方のなしくみを日本で導入するのに、ソーシャルダンスクラブを用意するのは現実的ではないけど、農園をつくって、みんなで行って、農作業したら元気になるんじゃないかということでは、農福連携はすごくいいアイデアだと思うんですね。

デイサービスへ行つて、毎日やりたくもないことをやらされるよりは、自由に農園に行つて働いて、ケアを受けないで、お金を払ってもらう側になるので、未来がある話だと思つています。農福連携にはとても注目しております。

生源寺 デイサービスとか、社会的処方の話を聞いていて、これは他人ごとではないところがあります。じつは私の家族もデイサービスにお世話になっていきますので、ちゃんとして



いるかどうか、一回確認してみようかなと思いますね。

白鳩会の農福連携の取り組み

生源寺 ここからは中村さん、森下さんの実際の取り組みについて、ご説明いただければと思います。それでは、中村さんから、白鳩会について、よろしく願います。

中村 先ほどご紹介しましたように、社会福祉法人白鳩会は、私の両親が1972年に立ち上げました。非常にかたい表現をしますと、当時は、「精神薄弱者」という言葉でカテゴライズされた障がい福祉の入所更生施設です。知的障がいのある方々が団体生活をしながら、できる活動をする施設で、大隅半島の片田舎で50年やってまいりました。

当時、日本の障がい者福祉は福祉元年と呼ばれていたようです。戦後、高度経済成長を経て国の財政も急激に充実してくるなか、福祉の分野が欧米に比べて非常に見劣りするという政府の認識があった時代です。戦後の孤児からはじまった、いわゆる社会の端っこにいる障がいのある子どもたちや成人に対しての福祉を充実させるために、政策的に社会福祉法人を通じて国の公金を活用するかたちで、日本独自のシステムとして社会福祉法人が発足したというふうに、私は学びました。

それで社会福祉法人が日本全国に広がっているんですけど、九州は、ほかの地域に比べると、特に社会福祉法人の数が多。一説によると、戦後、主要なエネルギーが石炭から石油に変化をするなかで、炭鉱が多かった九州は、炭鉱の閉鎖にともなって、新しい仕事をつく



るという雇用対策の意味で、福祉が大きくなったといわれる研究者もいらつしやるぐらいです。

私の両親はけっして福祉の専門家であつたわけではなくて、祖父が保育園をやつておりまして、保育園も社会福祉法人の事業になりますので、周りの人脈、わかりやすくいえばコネを使つた障がい者福祉を政策的に行うことができたと聞いております。

鹿児島県内には分散するかたちでたくさんの方の社会福祉法人が興つておりますけど、同じ時期にはじまつた社会福祉法人がたくさんあります。

私どもは大隅半島の端っこに生まれた法人ですが、私の両親、特に父は、当時はまだ30代でしたので、体も元気で、経済成長期という時代背景もあつて、非常に事業欲旺盛な、私から見てもあんな社会福祉法人の理事長はいないなというぐらい、非常に個性の強い人物です。事業欲が強く、福祉をやりながら、自分の組織を大きくしていくという気持ちがありました。

そうした父は、知的障がいのある方々を相手にしながら、リハビリとか、レクリエーションに時間を費やすのではなく、体を使つて働くことが向いているんじゃないかと、動物的な感覚で障がい者の農業をはじめているんです。事業欲旺盛でしたので、どうせやるなら、組織的な農業をめざして、土地の取得、さらには規模拡大を積極的にやろうといたしました。

ただ、当時の社会福祉法人、ないし施策には規制が強く、縦割り行政のなかで、農福連携は福祉の政策担当者からみれば論外でした。いまでは信じられないですけど、「なぜ、障がいのあるかわいそうな人たちを働かせるのか」と、あたりまえのように言われました。それ



でも両親は、「目の前に暮らしている障がい者は、確かに障がいはあるけれども、日々、朝起きて夜寝るというサイクルをこなしている。健康的な暮らしをしながら、体を動かして生産活動をして何が悪いのか」みたいなことを言っておりました。当時の行政には現場を知らない方が多かったので、非常にぶつかったようです。

父がやろうとしていたのは、現場に出て、障がいのある方々と毎日汗を流して過ごすことです。白鳩会の法人の理念は「共汗共育」です。共に汗を流して共に育つことが私どもの社是なんです。

じつはこの「共汗共育」は、社会福祉の父と呼ばれる「びわこ学園」*を設立した糸賀一雄さんの「共感教育」という言葉の「共感」を「共汗」にしています。おやじギャグなんですけど、私の父には「共汗共育」が非常にしっくりくる言葉だったようです。こうして、いまだという農福連携のはしりみたいなことを何もない時代にやっております。

1972年に法人がスタートして、その4、5年あとには農地取得をはじめております。行政とはぶつかりながらも障がい者と農業をやっていくことをはじめておりました。

1978年には農業を組織的にやるための農業法人を設立いたしました。社会福祉法人では制度的に農地の取得がままならなくなったときに、町役場の経済課の課長さんが、「農業法人だったらできますよ」みたいな助言をしてくださいました。当時、行政から批判を受けながらも、少数派ではあったけど理解してくれる方もいらつしやったようです。そういった方々と白鳩会を大きくしていくことを盛んにやっております。

当時は国が経済成長をしている真ただ中でしたので、借金することもあまり気にするこ

「びわこ学園」

1946年に糸賀一雄が滋賀県に近江学園を創設。園医として参加した岡崎英彦は、昭和38年に重症心身障害児施設「びわこ学園」を開設した。

となく、積極的に投資していきました。そういった意味では、福祉の制度も農政も、当時はいまより緩かったと思います。国では、田中角栄さんが発表した「日本列島改造論」のようなことが盛んで、地方でも同じでした。大隅半島の出身の国会議員には二階堂進さんと山中貞則さんがいて、大隅半島も政治的にいろんな政策が動いた土地でもあります。そうした地域で個性と個性がぶつかりながら、活動を続けてきたのが白鳩会です。

このように、行政とはぶつかりながらも、強烈な個性でもって福祉を盛り立てていくということをやっておりまして、入所施設を運営しながら、当時は授産施設*¹とっていた就労型の施設も運営してきたわけです。

私たちの農場「花の木農場」は、広さ約40ヘクタールで、東京ドームが5つおさまってしまうぐらいの広さです。お茶と養豚を中心にしております。福祉農園としては規格外の規模ですが、申しあげたように農業法人とセットで運営しておりますので、いわゆる「福祉」という概念にはおさまらないところはあると思います。社会福祉法人と農事組合法人をセットで運営することで、そのお互いの強みと足りない部分を補完しあうことができて、そのおかげか、近年になって、「花の木農場」を農福連携の先駆者にとらえてくださる研究分野の方も多いらしいです。大変ありがたいことだと思いますが、はじめた当時は、そんなきれいなものではなく、行政の指導監査で叩かれながらも、信念をもって取り組み続けてきたというのが実状です。

農場内には、お茶の荒茶工場を設置したり、豚を加工してハム・ソーセージを作ったりできる就労型の施設もあります。さらに言うと、その先のお茶のオリジナル商品や豚肉の加工

【授産施設】

心や体の障がいや家庭の事情などによって一般的な就労が困難な人たちに對して、就労の機会や技能習得を支援し、自立を助けることを目的とした社会福祉施設。2013年の障害者総合支援法の施行後は、「就労継続支援B型」などの形で機能が引き継がれている。

品を販売するアンテナショップもありますし、農場外では、鹿児島市内などにも販売所を展開しております。

こうして6次産業化（39ページ注）というところでも、社会福祉法人の基礎構造改革で就労型が参入する時代になって、いまの農福連携につながっていく。「障がい者が働く」ということに世間が着目したところに、われわれとしても高次の工場という取り組みを進めていったのが、いまから30年ほど前です。当時は「花の木農場」という名称はなかったんですけれども、ものづくりをして販売する過程で、私たちがやっていることは「価値になる」と感じていたものからです、「花の木農場」のブランディングをはじめてまわりました。



花の木農場の全景 約40haの敷地に、茶園や野菜畑、ガラスハウスなどが広がる（豚舎は車で10分の場所にある）。その他、敷地内に入・通所施設やグループホーム、アンテナショップ（農場レストラン）もある。遠方に見える山は、薩摩半島の南端にある開聞岳。



花の木農場の茶園 約7haの広さがあり、そこで、障がいのある方など、10人ほどが働いている。茶園全体で、年間90トンくらいの茶がとれ、農場内や鹿児島市内の店で販売している。



豚舎で豚に餌を与える利用者 1年間に約2300頭の子豚が生まれ、180日ほど飼育したのち加工して、ハムやソーセージ、ハンバーグなどの製品を製造・販売している。

称にも「花の木農場」という名前を使ったり、ものだけじゃなくて、行っているさまざまな活動を「花の木農場」というブランディングのもとに、地域やお客様から認識していただくというかたちをめざして、その取り組みを現在も進めております。

白鳩会が半世紀を超えるなかで、時代が変わって農福連携という言葉が市民権をえているんですけれども、白鳩会も半世紀を過ぎると法人として、言葉をよくいえば熟成してきているんですが、職員の高齢化、利用者の高齢化、担い手不足という課題にも直面しております。そうした課題を従来型の農福連携で補完し合うことだけで生産性を向上させていくという価値観は、消えてはいないんですけど、これからの花の木農場に、そこだけをすえていくということは、私の感覚ではやや難しいと思っています。農福連携を「障がい者が働く」ととらえている方がいらっしゃるとしたら、花の木農場では、それとは違う変化が起きはじめています。生源寺 いわゆる「農福連携」は「障がい者が農業で働く」だけではないとのことですが、具体的にどういうことか、教えていただけますか。中村 先ほど申し上げましたが、花の木農場は、東京ドームが5つ入ってしまうほど非常に広い農場で、お茶と豚だけではなくて、いろいろな作物の栽培に取り組んでまいりました。それぞれに職員と利用者を配置して、栽培量の拡大とか販売の拡大をめざしてきましたが、年齢が上がっ



花の木農場の製品

て、職員もだんだん減ってくるなかで、同じ生産規模、生産効率を維持していくことは非常に困難になりつつあるんですね。ですので、農場の広さの維持、マスとしての売上をキープしていくことをめざすとしたら、すごいエネルギーを必要とするわけです。このため、「障がい者が働く」という農福連携の一般的なとらえ方で花の木農場を維持していくということは、いまの花の木農場の規模ではもたないんじゃないかという感覚を私は持ちつつあるんです。

生源寺 そこはなかなか難しいんですけど、いわゆる農福連携は部分としてはともかく、問題は経営全体をどうしていくかということですね。

中村 そうなんです。

生源寺 大変な課題にも直面しながらですが、障がい者の障がいの中身にもよりますけれども、養豚のような家畜の場合と、お茶の栽培では、だいぶ違うんじゃないかと思います。そのへんは人によって、個性によって、配置が変わる場合もあるのでしょうか。

中村 じつは障がいの特性、ないし重いか軽いかの程度区分はもちろん無視はできないんですけど、単純に、障がいが重いからできない、軽いから汎用性があるということではけっしてないんです。それが農福連携のある意味ではおもしろいところで、仕事を細分化することによって、いくつかの仕事のバリエーションがあつて、何でも柔軟にこなせる能力の高い方がいらつしやるとしたら、それも作業の参加の一つであると思うんです。

一方、できることは非常に限定的で狭いんだけど、狭い分野の専門家というか、一つのこ

【6次産業化】
農業などの1次産業に、生産物の加工（2次産業）、販売・流通の3次産業の1:2:3次産業を合わせて6次産業といい、それを進めること。

そのピースがはまるというようなことが、障がい特性の重い方、ハードな方に見つかったときには、また違った喜びがあるんです。

社会福祉法人の立場で言わせていただきますと、納税者のみなさまから負託を受けている事業体としては、地域社会、経済社会のなかで居場所、役割がなかなか見出せない方々に対して、農福連携というツールを使いながら、はまる場所を探すということが社会福祉法人としてやるべきミッションだと常々思っています。生産性の追求と役割を天びんにかけながらやっています。

生源寺 いまの中村さんのお話について、ご質問があれば、お願いします。

中本 先ほど、高齢化しているというお話がありましたが、当初から通われているとか勤められている方がいらつしやるということですね。

中村 はい、そうですね。

中本 それは、平均は何歳ぐらいでしょうか。それから、当初は味方が少なく、だんだん理解者が増えてきたということですが、職員として、長く勤められている方ははじめから理解のある方で、お父さまとつながりの深い方だったのか、こういう方なのか、気になりました。

中村 大隅半島の過疎の地域は、非常に地縁、血縁が濃い場所です。うちは名家というわけではないんですけど、祖父が保育園をやっていたこともあって、私のきょうだいをふくめて両親の仕事を周りのみんなが知っていました。そうした土地柄もあって、地縁、血縁のなかでいろいろ頼まれたりということがある環境です。ですので、仕事に対しての共感という



よりも、単純に応援するということもあったと思います。

生源寺 いまのお話のなかには、ある意味では日本の農村社会の特徴がふくまれているような感じがしましたね。

中村 障がいのある方々が暮らしていくことの理解は、都市部で福祉施設を立地していくときの住民運動とはまた違ったとらえかたがあったようです。事業そのものへの応援というよりも、知っている人がやっていることだから、ということもあったと思います。だんだん雇用を生み出す場になってくると、うちの子を雇ってくれないかみたいなお願いがありました。当時は毎年10人ぐらい地域の高校生を採用していました。福祉の勉強とか何もしない若い子たちが、役場とか農協に次いで、どんどん入ってくる組織になっていたんですね。いまでは人材採用はめちゃくちゃ大変なんですけどね。利用者の平均年齢は、いまでは50歳を少し超えるくらいですね。

中本 農業の役割が変わってきているという感じですか。

中村 二極化していますね。昔からいる40年以上バリバリ働いてきた方々のなかには65歳になった方もいらつしやるし、最近では10代、20代で、知的障がい者というよりも、犯罪傾向にある障がいの方々が矯正施設から出所後に花の木農場に来ることもあって、二極化しています。「若いから仕事は何でもできる」というほど単純ではなくて、ここはまたいろいろな苦労があります。どこにはまるかを探していくということでは、障がいのある方々とまた違った探しかたが必要かなと思っています。

生源寺 障がいのタイプもあるかと思いますが、一緒に共同で作業する面もあるわ



けですね。

中村 そうですね。触法障がい者といいますが、一定程度の障がいのある方々で累犯の方がうちに来るといふ事例が続いています。

ウィズファームの農福連携の取り組み

生源寺 次に森下さんから、長野県のウィズファームの具体的な取り組みについてご紹介いただければと思います。よろしくお願いします。

森下 私は生涯で2回死にかけたことがあります。1回目がギランバレー症候群*です。いまではギランバレー症候群自体は死ぬ原因ではないんですけど、私が罹ったときはそうではなくて、原因もあまりわからなくて、急に歩けなくなって、その日のうちに握力もなくなっていました。地元の病院では、症状からギランバレー症候群だろうと診断されて、うちでは診れないからということ、隣の市の大きな病院に行つて改めて診てもらったら、やっぱりギランバレー症候群だと診断がでて、主治医の先生からは、「進行が速いから、もしかしたら今晚、心臓が止まるかもしれない」といわれたんです。

当時、治療方法は、人工透析で血液を外に出してきれいにして戻すか、血液製剤を注射するか、といわれました。ただ、当時の血液製剤は完璧ではなかったので、「B型肝炎、C型肝炎、HIVになる可能性があります」と言われました。この2つから治療方法を選んでくださいと言われて、体に負担が少ない血液製剤による治療を選んだんですけれども、それが金額が

【ギランバレー症候群】

末梢神経の障がいによって脱力・しびれ・痛みなどの症状が起きる病気。

めちやめちや高かったです。でも、治療がうまくいつて、なんだかんだでいまこうやって生きています。

2 回目は、胃カメラを飲むときに、喉にキシロカインという麻酔をシユシユとしますが、1 年目は大丈夫だったんですけど、2 年目にショック状態になってしまったんです。いまはキシロカインは使えないので、歯の治療などをするときも、別の麻酔薬を使用してもらうようにしています。

昔けっこうワルだったので、「罪と罰」じゃないですけど、悪いことした報いなのかとか思いながらも、「なんでいま生きているんだろう」ということを考えたときに、「悪さをしてきたから、今度は社会に貢献しなさい」という意味なのかと思うことができました。

役場の職員を辞めて、居酒屋を経営しているときに、居酒屋に来てくれたお客さんのなかで障がいをお持ちの方がいて、その方から「一生懸命働いても月に3000円しかもらえないんだ」という話を聞いたんです。当時は3000円が最低のラインだったんですね。もつという方法がないのかを私なりにいろいろ調べて、そ

福祉的就労			
種類	就労移行支援事業	就労継続支援 A 型事業	就労継続支援 B 型事業
特徴	就職のために必要なスキルを身につけ、一般企業などへの就職に向けて準備する。	雇用契約に基づく就労が可能な障がい者が働く。	雇用契約に基づく就労が困難な障がい者が働く。
雇用契約	なし	あり	なし
賃金	基本なし	給与が発生する	工賃が発生する
対象	障がいのある人、難病のある人で、一般企業への就職を希望する人	通常の一般企業などに雇用されるのが困難な人	通常の一般企業などに雇用されるのが困難な人
年齢制限	65 歳未満	65 歳未満	なし
利用期限	原則 2 年以内	なし	なし

福祉的就労の種類とちがい 福祉的就労には、就労移行支援事業、就労継続支援 A 型事業、就労継続支援 B 型事業の 3 つがあり、障がいのある人の状況によって、利用できる福祉サービスに違いがある。(厚生労働省 HP の情報をもとに作成)

のときはじめてA型事業所、B型事業所があるということを知って、株式会社ひだまりを立ち上げて、障がい福祉サービスに参入していったという経緯があります。

私たちの農園の一番の特徴は、先ほど中村さんもおっしゃっていましたが、農作業を細分化することをすごく大事にしていることです。私たちはりんご栽培がメインで、世の中の方は、障がい者の方に果樹は難しいんじゃないかと思われているんですけども、そこは農作業を細分化することで可能になると私たちは思っています。

たとえば摘果^{てきか}作業で、農家の方は3つの摘果をします。その3つの作業を分解してあげるんです。1つが腋芽^{えきが}摘果です。2年枝といって、

去年伸びた枝についている花、実は全部とってしまいうんですね。というのは、去年伸びた部分にりんごをならしてもおいしくないりんごがなってしまふといわれています。そこにできた花、実をとって枝を休ませてあげて、翌年においしい実をたくさんつけてもらいます。私たちの場合は、その去年伸びた枝がわかるかわからないかを全員の利用者さんに1回体験してもらって、判断をさせてもらっています。

次は条件の悪いところについてしまった実の摘果です。簡単に言うと、実が枝の上にのっかってしまっているような場合で、これを逆さ実といいます。りん



りんごの花 たくさんの花が集まって咲く。この1つの花房に複数の実ができるが、摘果して、大きな実を1つだけ残す。

ごのおしりが上を向いてしまっていて、おしりにしか光が当たらないので、おいしいりんごになりません。ですから全部とってしまいます。それ以外にも条件の悪い場所があるんですが、それを説明して理解ができるかを確認します。

最後に、りんごは、中心花と、その周りに側花があつて、これを1つの花房と呼んでいます。それぞれの花から実ができますが、一輪摘果といって、この1つの花房のなかで、一番大きい実だけを残して、残りの実をすべてとります。実が大きいか小さいかが判断できればいいので、ほぼ全員の利用者さんができます。

こうして3つの作業に分けることで、障がい者の方は必ずどこかの作業に入ることができます。

りんご栽培は、この摘果作業が1年間のなかでものすごく作業時間が長いので、摘果作業ができれば、障がいがあつてもりんご栽培ができるんですね。

われわれはもともと農家でなかったし、農業自体もはじめてだったし、先ほど言ったように、そもそも農業はやらないと思っていました。それでも農業を勉強



ウィズファームのりんご園 りんご園は1haの広さがある。障がいのある方など、16人が働き、ふじ、つがる、シナノスイートなどのりんごを育てている。

しはじめたのが障がいをもった方たちと一緒に「これはああだね。こっちはこうだね」と話し合いながら、自然にいまのスタイルができ上がったんです。

そういった感じではじめたんですけれども、長野県松川町の農家のりんごは、「松川町のりんご」としてブランドになっています。昔は、それこそ農協に出荷して、農協があちこちにりんごを販売していたんですけれども、どこかで食べられたお客さまが「このおいしいりんごはどこのだ」と、おいしいことに気づかれて、ほとんどのお客さまが直に農家さんから買うようになったんです。

いま実際にJAに出荷しているのは、JAの役員になった方と、高齢で直に販売するのが煩わしいと思っっている方だけなんです。そのことに目をつけた当時のNHKの方が、そのりんごは「ふじ」という品種だったんですけれども、あまり市場に出回らないりんごという意味で、「幻のふじ」と名づけてくれたんです。そうしたこともあって、「松川町のりんご」「松川町のふじ」というとけっこう有名なんです。そういうブランドのりんごを、たまたま自分たちも栽培することになったので、一つの強みになっていたんです。

実際、農家さんたちは、大きな家に住んで、いい車に乗っているんですよ。私も「りんご栽培をやったら大きな家に住んで、いい車に乗れるんだ」と思って何の気なしにはじめたんですけれども、ちょっと考えが甘かったのが、販路をまったく考えていなかったことです。地元では、りんごは隣近所からもらうものという意識で、りんごを買うという意識はまったくないんです。

「さあ、困ったぞ」ということで、最初のうちはいろいろなマルシェに参加して、とにかく



りんごの味と、私たちの名前、顔を覚えてもらって、ファ
ンを増やすことに一生懸命だったんです。ただ、しよっ
ちゅうマルシェに参加できるほど資金に余裕があるわけ
でもなかったので、しばらく困った状態が続いていたと
きに、ノウフクJASという農林規格ができるという話
を聞いて、もしかしたらブランディングの一つになるか
な思ひまして、ノウフクJASを取得することにしまし
た。

ただ、農福連携も同様ですけれども、世間的にはノウ
フクJASを知らない人のほうが多いので、マルシェで
販売するときには、「農福とは何か」とか、「ノウフクJ
ASとは何か」ということを丁寧にお話をさせていただ
きました。

そうすると、お客さんは不思議なもので、やっぱりス
トーリー性とか、物語がある商品を買ってくれるんです。
しかも多少値段が高くて、物語がある商品を買って
くられて、当時は売上げは右肩上がりだったなかでも、4、
5年ぐらい赤字が続いていたのが、ようやく黒字と右肩
上がりになったんですね。そういった意味では、ノウフ



ウィズファームのりんご 「幻のふじ」と呼ばれる松川町のりんご。ノウフクJAS 認証事業者のウィズファームで栽培したりんごには、その証明となるノウフクJASのシールが貼られている。

クJASをはじめてよかつたなと思っています。

それでも、ノウフクJAS自体は、まだまだダイヤモンドの原石で、それを磨くのは、ほんとうは国が磨いてくればいいんですけれども、いまはわれわれ事業者が磨かないと輝いてこないの、一生懸命磨きながら販売をしているところです。

銀座に長野県のアンテナショップがありまして、ここでも私たちのりんごを販売してくれています。昔、元TOKIOの城島茂さんが私たちの農場にテレビ撮影で来てくれたことがあります、その撮影前の下見でディレクターさんが1回来たんです。「私たちのりんごを東京で買えるか」という質問があったので、「銀座にある長野県のアンテナショップで買えますよ」とお伝えしたんです。でも、実際にディレクターさんが買いに行ったら、ほかの農家さんのりんごはあるけど、私たちのりんごだけ売っていなかったそうで、店員さんに理由を聞いたら、「りんごが納品されると、ウィズファームのりんごが一番最初に売り切れる」と店員さんがおっしゃった。不思議に思ったディレクターさん



銀座 NAGANO 東京・銀座にある長野県のアンテナショップ。ウィズファームのりんごなど、長野県の特産品を販売している。



が、「それはなぜですか」と聞いたら、りんご一個一個にノウフクJASのシールが貼ってあること、ノウフクJASの意味をアンテナショップの店員さんがお客さんに説明してくれることで、みなさんが買ってくださる。都会のほうがエシカル消費^{*}に対する意識が高くて、そういった意味でもノウフクJASの恩恵にあずかっていると思っています。

それから、りんごの木には、普通樹の栽培と、わい化栽培があります。かんたんにはいいますと、普通樹の栽培は、木が太く、大きくなる栽培で、わい化栽培は台木がちよつと違って、木をあまり大きくしないで栽培する方法です。いま農家さんの高齢化に伴って、わい化栽培とか高密植栽培といった栽培に変わってきています。

普通樹の木は、実がとれるようになるまで、10年近くかかりますが、それからしばらく実がとれます。その木を切ってしまうのはもったいないということで、われわれがいまやらせてもらっているりんご園は、栽培の担い手がいなくなってしまうたりんご園をそのまま引き継いで、普通樹を生かしてやっています。とはいっても、普通樹は、頂部優勢といって、枝が上へ上へと、高いところに向かってどんどん伸びていくんです。ですので、普通樹を栽培する一般の農家さんは高所作業車をもっていて、その高所作業車で上まであがっていつてりんごをとっているんです。

当初は、高所作業車の導入も考えたんですけども、それを利用者さんにやつてもらうのがいいのか悪いのか、いろいろ考えているうちに、そうするよりも、もつと低く仕立ててしまったらどうかと考えて、われわれは冬の剪定で、六尺（約180cm）の三脚の5段目まであがって手の届く範囲の高さまでに、木を低く仕立てています。

【エシカル消費】

社会的な課題の解決に取り組む事業者や商品を応援しながら、消費活動を行うこと。「倫理的消費」ともいう。

りんご農家は1本の木からいかにたくさんの実をとるかが、収入アップに直接つながりますが、従来の栽培方法だと枝が混みあいすぎてしまつて、特に障がいのある利用者さんたちには危険があります。作業に没頭してしまい、すぐ横に枝があるのに気づかなくて、横を向いたときに枝で怪我をしてしまうことがあるんです。そうした危険をなくすためにも枝を切つてしまいます。ですので、普通の農家さんよりは1本の木からとれるりんごの量は間違ひなく減つていきますけれども、そこまで徹底して安全にやります。

それから、私たちは野菜関係は有機栽培でやっていますが、りんごは慣行栽培でやっています。ただ、除草剤はいつさい使わないでやっているので、病害虫の防除をします。その防除で枝が混みあつているときと、そうでないときで農薬の量が全然違つて、混みあつていないと、少ない量ですみます。そういった部分でも障がい者の人が入つてくれて、枝をしっかりと切るので、太陽の光がしっかりと当たるようになって、りんごの色づきもよくなっています。

あと、私たちの農園には、いろいろな人たちが視察に来てくれています。最近多いのは韓国からの視察で、4回ほど来ています。来月も、再来月も来る予定です。その視察の目的は、「農福連携」の現場を見たいということです。農福連携が日本だけじゃなくて、外国にも広がつていけばいいなと思っています。

さらに言いますと、先日、東京のビックサイトで開かれた「アグリフードEXPO」に出展させてもらったとき、バイヤーさんに「農福連携とかノウフクJASつてご存じですか」と尋ねたら、ほとんどが知らなかったんです。ですので、もっともつと広げていかないといけないと改めて思いました。



先ほど中村さんもおっしゃられていたんですけれども、私たちのスタッフも利用者さんも高齢化していくなかで、どういうふうに維持していくか。松川町は人口約1万2000人で、高齢化率もけっこう高めな町ですが、町長が儲かる農業をめざしているんです。「農業は儲からない」というイメージが強いので、儲かる農業にすることがベースなんです。これは農福連携とはまったく切り離して、農業だけで考えたときです。その儲かる農業に福祉をうまくつなげられたら、利用者さんの工賃も上がって、利用者さんも潤うと思うんです。ただ、そこで働く職員の利益をどうやって追求するのかというと、報酬改定で単価をよくしてもらわない限りは難しい部分もあります。私としては、令和9年度の報酬改定が上向きになることをすごく期待しているんです。財務省が厳しいことをいっているという話も聞いていますので、そこはどうか、まったくわからないんですけれども。



「アグリフード EXPO 東京 2025」でのウイズファームの出展ブース 「アグリフード EXPO 東京 2025」は、8月20日から2日間にわたって、東京ビッグサイトで開催された。国産の農林水産物・食品の商談会でウイズファームは、ノウフクのぶどうやりんごに加え、ノウフクリんごでつくったりんごジュースなどをバイヤーに売り込んだ。

いまお話したような感じで、私たちの場合は、みんなが仲間、チームみたいな感じからスタートして、実際いまも同じような雰囲気です。

もう一つ特徴的なことは、当初、「ひだまり」という施設で、障がい者に何の作業をしてもらうかを考えたときに、私がやっていた居酒屋をラーメン屋にしてA型事業所の従たる事業所とし、そこに利用者さんに来てもらって働いてもらいました。このラーメン屋は、おかげさまでいまは行列ができるぐらい人気の店になって、A型事業所として十分にやっていますかたちになっています。

事業が1つだけでは不安だと思いついて、地元を向けたら、りんご栽培が盛んな地域だったという理由から、りんご栽培に参入しています。

うちは小さな会社なので、法人のスタッフは8人しかいません。その8人のうち2人が、触法者と知的障がい者なんです。触法者の方は、薬物をやられた方だったんですけども、うちに勤めていても最初のうちは毎月1回、保護司さんのところに行くのと同時に、保護観察所に行つて尿検査を続けられていました。最終的には、「大丈夫」という判断で、問題なく働いています。

薬物依存症の方は、依存症から簡単に抜けられないなかで、その人は執行猶予だったこともあって、刑務所には入らないで、執行猶予中にうちに来ていました。保護観察所の方が本人に「よく薬物に手を出さないでがんばれたね」と言ったら、「農業をやっていると無我夢中で。あつという間に5時、6時になっちゃうし、家に帰ると疲れていてすぐ寝てしまつてすぐに次の日になる。すごくいい生活スタイルができていて、薬物をやろうなんていう気が



もならなかった」と言っていましたよ、と保護観察官が教えてくれたんです。

そういった意味では、いろいろな方に対して農業は可能性があるものだと感じています。

生源寺 森下さん自身が農業の新規参入者でもあるわけですね。

森下 そうですね。

生源寺 新規参入で、技術的なこと、あるいは経営を学ぶプロセスと、農福連携で障がい者の方、あるいは薬物中毒の経験者の方を組み込んで事業をうまく作りあげていくことを同時にされているという印象がありますね。中村さんの白鳩会にも感じられました。

ところで「こういうかたちが農福連携ですよ」という典型が2つあります。1つは障がい者雇用施設、あるいは社会福祉法人が起点となって農業に取り込むタイプ。もう1つは、農業法人というか、農業の側から福祉法人などに対して農作業を委託して、農業経営側からスタートするタイプがあるようですが、中村さん、森下さんのお話を聞いていますと、そう単純な話ではなくて、それらが組み合わさって展開をしていくことによって、深みが増しているように思います。そんな印象がありますね。

周囲の農家との関係は？

岡村 私から2つ伺いたいことがあります。まず、お二人とも、もともと農業をされていなかったということです。私も新潟で農業に関わりましたが、農業を知らないとなかなか参入しにくいと思うのです。そこで、ブレーンとして農家の方に入ってもらったのか。



もう1つは、農福連携に関わる農業は有機志向が強いように思いますが、従来の日本のマジョリティの農家さんたちからすると、けっこう敵認定されやすいことをやっていることが多いと思いますが、周りの反応はどうだったのでしょうか。「あの人たちは違う世界の人だから」という感じの反応なのか、いろいろバチバチとやりあったのか、お教えいただけますでしょうか。

中村 私は農業も福祉も学校で学んでいないので、自分が中心になって花の木農場、白鳩会を引っ張るという感覚はじつはそれほど強くありません。もちろん、マネジメントとして責任があることは認識しながらも、自分が考えている世界観を現場で主張するという意識はないんです。でも、職員は農家出身で、得意分野があったりしますし、私自身は農業が素人でも、農業大学などで、お茶、養豚の専門性を身につけている職員がいますので、まったくの素人集団ではありません。ものづくりをする以上は、しっかりとクオリティを追求していくということも意識しています。自分だけでやっているわけではなくて、技術者、指導者は採用できなくても、周りから講師で招いたり常にはやっています。商品開発でも、専門性を反映させることは父の時代からずっと続けております。

そういったなかで、岡村さんがおっしゃったオーガニックとか自然栽培だけにこだわっているわけではありません。むしろ花の木農場は規模を追求してきました。規模を追求すると農薬を使ったり、必ずしも有機栽培ではない農業を取り入れていかないと経営していけないところがありました。ただ最近では、お茶はオーガニックに移行して有機JAS認証をとっております。以前は、そんなことはなくて、普通の慣行栽培のお茶農園をしていました。で



すから、うちは農業分野では地域とのあつれきというのはほとんどなくて、技術の習得に關しても、来るもの拒まず、積極的に外部の技術を受け入れてきた背景がございます。

生源寺 森下さんはいかがでしょうか。

森下 技術的な部分は、JAの組合員になってJAから教えてもらうこともありましたが、私は昔、空手道場をやっております、周りのりんご農家さんはみんなお弟子さんたちだったんです。ですので、りんご栽培で、わからないことがあると、「ちよつと教えてくれよ」と連絡するとすぐ飛んできて、居酒屋の生ビールをごちそうして、教えてもらったり、そういうつながりが田舎のすごくいいところなんですよ。そういうこともあつて、技術的には困らなかったし、すごく助かっています。

はじめた当時、周りの人は、「障がい者に農業できるの？」と、はつきりおっしゃっていました。でも、実際に農業ができている姿を見て、うちがやっている圃場の隣にあるりんご農家さんは、「あと5年後に自分は75歳になつて、もうりんごをやらなくなる。だから、ただで土地をやるから、引き継いでくれよ」と言つてくれます。いまでは周りの人も、障がい者の人も農業で活躍できるといふことを認めてくれるのかなと思っています。

生源寺 野菜は有機で取り組んでいるとおっしゃっていました、これについて周りから「あれは何だ」というような感じで見られることはないですか。

森下 松川町は積極的に学校給食に有機を取り入れている町なのですが、自分たちもふくめて、果樹の有機はものすごく難しいと思っています。ですから、果樹はみなさんもさすがに有機は手がけないですけれども、野菜は、ほかの農家さんも「おれも有機にしてみよう



かな」と思っいていらつしやる方はけつこういますね。

生源寺 私は1970年に大学に入学したんですが、当時、有機栽培は変わり者、あるいは学生運動くずれというイメージが非常に強かつたんですね。現在はその意味では変わったなという感じがします。もちろん、年齢の高い人のなかには「あれは何だ」という人もいないわけではないんですけどね。そのあたりは変わったわけで、特に新規参入の比較若い層は、たとえば20代、30代の方は、有機栽培に取り組むケースが多いという傾向がでています。有機に関する世の中の流れはかなり変わったなという感じはしますね。お二人ともそれぞれしっかりやっておられるからこそ、周りに支えられているのかなと思います。

農福連携によってかわる地域社会と人間関係のありかた

岡村 『コミュニティ』誌ということではいますと、お二人はコミュニティにとけこむ力がすごくありますよね。空手のお弟子さんが周りにいるとか、地域に知り合いがたくさんいるとか、けつこう大事なことじゃないかと思うんですね。地域にとけこんでいいことをやろうとする団体でも、周りの人たちとあつれきを生んでしまうところがあるけれども、お二人からはそういう気配が全然感じられないので、それが成功の秘訣かもしれませんね。

生源寺 まさに地域社会、特に農村部には根つこのところがある。新規参入というかたちで来られた方でも、けつこう苦労されて、結局出て行ってしまうケースもゼロではないんですね。今日のお話を聞いていると、森下さんは中学の時からおられますので、むしろ地元の



人ということかもしれないけれども、地域には外から来た人も受け入れる感覚はあると考えてよろしいでしょうかね。

森下 そうですね。もちろん町は受け入れるんですけど、住む家が全然ない。そこが町でも非常に困っていて、空き家はあるんですけども、やっぱり空き家も財産なので、貸したくないと思われている方もいて、そこが受け入れのネックになっています。

3年、4年ぐらい前の話ですけど、府中にある少年院か刑務所から、うちのB型事業所で農業をやりたいという方がいるという連絡をいただいて、私たちは「ウエルカムですよ」とお伝えしたんですけども、町に住むところがなくて、県の行政にも間に入ってもらったんですが、通勤範囲内に住む家が見つからなくて、その話はなくなってしまったんです。

10月4日、5日に町でひきこもり支援の行事をするんです。1日目が森林セラピーをして、2日目にうちの農場で農作業体験をしてもらう。それもあって、今日もひきこもり支援をされている団体の方から問い合わせがあつたんです。農業に興味をお持ちの方がうちのB型事業所を利用できるのか、住むところはあるのかという問い合わせで、基本的にうちはウエルカムなのでいいんですけど、じつは住むところがないということで、「町と相談しながらお返事します」と回答はしたんです。

生源寺 お二人の取り組みについてのお話を聞いて、中本さんは質問ありますか。

中本 先ほど森下さんが「ノウフクJASとか農福連携の認知度をもっと高めないとけない」ということをおっしゃっていて、じつは私、今年の年初めに、別の案件でインターネットを通じて、2000人に、「農福連携を知っていますか、ノウフクJASを知っていますか」



というアンケートをしてみたんです。

そのアンケートでは、ノウフクJASを知っている人はほんとうに少なかった。「よく知っています」「知っています」「どちらかというと知っています」という回答が2000人のうちの10%にも満たなかったんです。年齢でいうと、20代の若い世代の15%ぐらいは「知っています」という感じで、年齢が高くなるほど「知らない」という割合が高い。

それを有機JASと比較してみたら、有機JASは年代に関係なく「知っています」という人は3割以上いるので、もしかしたらノウフクJASも、いま若い人しか知らないけれど、有機JASのように普及していくと、年齢差がなくなっていくのかなと思ったりしました。

生源寺 岡村さんはいかがでしょう。

岡村 お二人が触法者を支援していると聞いてすごく感銘を受けたんです。さつき私はホームレスの方も支援していると言いましたけど、ホームレスの方のなかにはけっこう触法者の方もいるんです。だいたいは軽犯罪の繰り返しの方が多くて、最初だけ重たい犯罪というところもあるんですが、なかには、前科10犯で、ずっと刑務所にいましたという人もいます。要するに居場所がない、帰るところがないと、仮釈放もない。ずっと刑務所の中にいて、外に出たら寂しくて、万引きしてまた刑務所に戻っちゃうみたいながいる。「居場所がない」ということが重要な問題なんですよ。そういう人の受け皿として、農福連携は重要かなと思っています。

お二人はちょっと違うと思うんですが、もともと日本の農福連携はどちかというと農業サイドからできて、農家の人が高齢化して働き手がいなくなってきたときに、周りを見たら、



発達障がいの人元気がいた。「元気な発達障がいの人に働いてもらったら、ワイン・ウィンド」みたいな話が多いんです。

一方で、オランダとかイタリアを見ると、発達障がいの人もいるんですが、触法の方とか生きづらさを抱えている人、長期失業で自信をなくしてしまっている人、あとは薬物中毒の人が中心だったりします。オランダだとうつ病の方も農園で働いていますね。精神科医として言いづらいところもありますが、軽症だったら、薬よりももしかしたら農園のほうが心身にいいかもしれないと思うんです。

日本はどちらかというと若くて元気な発達障がいの人が中心となりがちで、それはそれでいいし、それをべつに悪いと言っているわけじゃないんですけど、それを柱の一つとして、もう一つの柱にはさまざまな生きづらさを抱えている人がいるべきであって、今後さらに高齢化していくなかで、高齢者の居場所、活躍の場、出番と役割になっていくと思うんです。お二人は農業という経済活動のなかで、これからも戦っていると思うんですが、たとえば高齢者のケアを取り入れてしまうと、やはり生産性は落ちてくると思うんです。そういう意味では農福連携のありかたも変わっていくのかなと思っていて、さっき中村さんが経営がだんだん苦しくなっていくだろうとおっしゃっていたのは、そうしたこともあると思うんです。

中村 そうですね。お茶、養豚経営は、付加価値、ブランディングも大きいんですけど、商品を販売することを資金調達のツールととらえた場合には、基本的には収量を上げて流通にできるだけのせていくことになると思うんです。ただ、そこに対しての人材供給が難しく



なってきた場合には、どうやら行き詰りそうだなという感覚は、令和元年に理事長職を引き継いだときからあります。

でも、農地を縮小するわけではなくて、事業継承のなかで土地をどう活用していくかというときに、農福連携がウィン・ウィンの関係で、生産性というところだけでとらえている背景があったんですが、私はそうではなくて、「ピースがはまったときの利用者の居場所と役割が輝く」みたいなとらえかたを常々しています。われわれが農場のなかでそういう喜びを感じたときに覚えるある種の感動は、けっしてわれわれの組織だけのものではなくて、やりかたによっては、地域の方、さらには花の木農場に足を運んでくださる方にも共有できるのではないかと思っています。

つまり、体験とか交流を生みだすことによって、そこで生産活動を行わなくても、ものづくり体験、先ほど森下さんも農園での体験のことをおっしゃっていましたけど、まさにそのことが農場に来る目的になるということでは、大事なことなくないかなととらえています。

いまは障がい者福祉のなかでも体験をビジネスにしている法人はありますが、非常に少なく、障がい者もっているほんとうの意味での潜在的な価値といえますか、彼らもっている役割を社会のなかで発揮できるには、がんばって働くことだけじゃなくて、同じような悩み、あるいは違う悩みをもった方々、もしくは健常者であってもつらい体験をもった方々が、一緒に活動し、時間を共有したときに生みだす新しい安心とか生きる力みたいなものがあるんじゃないか。そこをかたちにできたらなと思っています。



生源寺 私、冒頭に非常に軽くウィン・ウィンなどと申しあげましたけれども、そう簡単なことではないんだなと思いますね。これは岡村さんの論文だったと思いますけど、「農家フレンドリーでいくか、福祉フレンドリーでいくか」という表現を使われていて、農業経営側を優先的に考えるか、福祉、障がい者の就労のありかたを優先的に考えるのが問われているわけです。場合によると、どちらかに偏りすぎてしまうかもしれないけれども、お二人の取り組みはそこをうまくバランスをとりながら、それぞれの段階において、つまり年月の経過とともに別のレベルに到達しながら、両者をウィン・ウインの関係にすることに取り組んでこられたと感じました。

岡村 そのバランスが難しくて、お二人の話を聞いていると、農業のこともしっかり考えているし、福祉のこと、特に人のことをよく考えているんですね。だから、極端なことを言くと、儲かることだけを考えたら、元気な障がいのある方を集めてきて、「働け、働け」とやればいいわけだし、逆に、福祉マイナンドにどっぶりつかってしまつて、政府のお金で、「安心なことだけやっていいよ、疲れたら休んでいいよ、ゲームやっていいよ」みたいな感じになつちやつたりする。私も医療福祉系なので、福祉はどうしても囲いこんでしまふ。どっちもよくないですよ。経済原理だけじゃだめだし、福祉マイナンドだけでもだめで、そのあいだをうまくつないでいくイノベーションが必要で、たぶん、お二人が本能的にやって

いらつしやるなかにそれがあるんでしょね。特に森下さんは居酒屋とかラーメン屋とかい
ろんな起業をされているようなので、そういう工夫があるんだろうなと思ひながら聞いてい
ました。

森下 うちは高齢者にもお世話になっていて、それこそ摘果作業が忙しくて作業が間に合
わなそうなどときには、地元の高齢者にお願ひしています。お願ひする地元の高齢者の方たち
はみなさん農業経験がある方なので、私たちよりも摘果作業が速いんですよ。そういう方た
ちにも活躍してもらっています。

重きを置いているのが農業なのか福祉なのかという話でいうと、すごく難しいんですけど、
私たちは携わってくれている人が、障がいがある方やひきこもりの方、触法者、高齢者と、
たまたま福祉でくれる人だけであつて、一緒にする作業がたまたま農業だったというよう
な、そんなラフなイメージなんです。それもたまたま成功していて、「育てる」という言
い方はすぐくおこがましかもしれませんけれども、人を育てることがイコール農業をふくめ
た地域を育てるかたちになっていると思つています。

中本 いまの農業か福祉かということで、岡村さんがさつきおつしやつていた海外の事例
で、オランダのケアファームだと農家さんが福祉事業をやつているというお話は、日本でも
ありうるかと思うんです。そういう制度を農家さんが積極的に活用してケアを提供し、それ
を収入源の一つとする取り組みかと思うんです。そういった取り組みを、中村さん、森下さ
んは、参考にされていらつしやるのでしょうか。

それから、森下さんがおつしやつていた韓国からの視察について、韓国は治癒農業という



言い方をしていると思うんですが、こういった方が視察に来られているのか。福祉系の方が多いのでしょうか。

森下 いままで韓国から視察に来た人たちは、全部農業サイドですし、これから視察にこられるのも、2回とも農業サイドですね。

それから、海外の事例はべつに何も参考にしていませんね。

生源寺 オランダは、国の制度によって支えていて、変な話ですけど、決まったやりかたでやらないとだめなところがあるかなという印象がありますね。

都会における農福連携

生源寺 地域社会との関係という面では、お二人とも農村部で、非常にしっかりした取り組みがあったわけですけども、都市圏は、障がい者、ひきこもりの方、あるいはそのほかの方もかなり高い密度でおられますよね。それと、都市であるがゆえに園芸に対するあれみみたいなものが強いという面もあると思うんですが、このあたりについてはどうでしょうか。

岡村 私は、東京・板橋区の高島平^{たかしまたいら}で農園をやっているの、その質問には、私からお話してよろしいですか。

新潟で農園をやってすごくよかったので、これはぜひ都会でもやりたいと思ひまして、高島平で農園をはじめたんですが、都会は農業を経験したことがある人が少ないんですね。新



渴では基本的にみんな農作業ができるんですよ。だから農業技術について、まったく困らないんです。ただ、新潟で地域の高齢者の方に、「農業をやって楽しく過ごしましょう。認知症があっても農業をやりましょう」と言うと、みんな「米作りは死ぬほどやってきたし、あんなことはもうやりたくない」というんですね。でも都会だと、経験者が少ないうえに、農業とかガーデニングは、お金持ちの道楽みたいなイメージがあるのか、みんなすぐやりたがるんですよ。それから新潟では移動手段がないことも課題でしたが、都会は、交通が便利。特に高島平のようなマンモス団地だと、雨の日でも濡れないで農園まで来られる人もいます。

それから、僕らが板橋本町の小さい農園をやるときに、参加する高齢者のQOL（クオリティ・オブ・ライフ／人生の満足度）と認知機能を調べたんです。都会の認知機能が低下した高齢者は、家にひきこもって、あまり人と接する機会がない。僕らの農園は小さいんですけど、そこで少し農作業をするだけでも、すごい元気になっちゃうんですよ。もしかしら高齢者のQOLとか認知機能とかの効果は、都会のほうが大きいかもしれない。田舎ではもともと庭や畑で家庭菜園をけっこうやっているの、「いい取り組みですね。でも、うちの菜園もけっこう忙しいんです」と言われてしまう。そんなこともあって、都会は無限の可能性があるんじゃないかと思っています。

農福連携のような取り組み、人々をつなげるような仕組みをつくることは、ちょっと政治的な発言になるかもしれないけど、国防とか防災にも役に立つと思うんですよね。たとえば地震とかが起きたとき、誰も知り合いがいないと助けあうこともできない。あまり隣人に干





高島平団地（東京都板橋区） 昭和 40 年代に開発された代表的なマンモス団地のひとつ。地下鉄で都心部と結ばれ、大手町まで約 30 分と交通の利便性がよく、周辺にも住宅地が広がっている。



じゃがいもを育てている
プランター

高島平にある農園で野菜を育てる
地域住民

涉しない東京のような場所でも、農園で知り合いになっていけば、お互いに防災力が高まる。高島平と一緒に農園をやった人たちは、鍋パーティーをしたりもしています。すごく可能性のある領域だと私は思っています。

ノウフク商品をさらに普及するには

生源寺 先ほど森下さんからエシカル消費の話がありましたが、ノウフクJASの情報をどういうかたちで買う側、あるいは都会の人々に伝えるかということも一つの課題としてあると思います。ノウフクJASの認証制度は立ち上がってからそんなに時間が経っていませんが、何らかのかたちでうまく伝えることができれば、広がりが出てくるかなと思いますが、この点について何かありますか。

森下 農福の産品だけを扱う商談会をやってくれていまして、今年で4年目になります。いまはバイヤーさんも農福の産品を目当てに来るんですが、私が1年目と2年目に参加させてもらったときに、貼ってあるノウフクJASシールを見て、「これ、何？」と聞いてくれたのが星野リゾートさんだったんです。その後、星野リゾートさんの2つのホテルがうちのりんごジュースを納入してくれるようになったんですが、そのきっかけはノウフクJASのシールだったということがあります。

同じ商談会で、株式会社泉州屋という大阪にある卸業者さんが、仲卸としてではなくて、泉州屋さんでつくるスムージーの原料として、普通のりんごではなくて、何か付加価値があ



November - ノー

29 - フク

11月29日は

農福連携イベントを全国開催！身近なノウフクを探しに出かけてみませんか？

「イベント情報はこちら」

「ノウフク」の日

農福連携とは、農業と福祉が連携し、障害を持った人をはじめとする多様な人たちが、農業などで活躍することを通して、自信や生きがいを持って社会参画することを実現する取組です。

「農福連携等推進ビジョン(2024改訂版)」(令和6年6月5日決定)において、11月29日を「ノウフクの日」に制定し、農福連携等の更なる展開や普及に取り組んでいくこととしています。

ノウフクの日のポスター 11月と29が、「ノーベンバー」「フク」と読めることから、毎年11月29日をノウフクの日としている。(写真は、農林水産省HPより)

るものがないという要望があつて、うちのノウフクJASのりんごを選んでくれたことがあります。

同じように、岐阜県にあるスーパーが、ノウフクJASのシールが貼つてあるりんごを販売したいと言つてくれました。これもノウフクJASの効果だと思つています。

ただ、そうはいつでも、先ほどから申し上げているように、まだ認知度が低いので、これからさらにノウフクJASの取得者が増えていつてほしいと思いますし、いま自分のなかで取り組みたいと思つているのが、「農福」に「食」を加えることです。飲食店にフォカスして、そこでノウフクJASの商品をとつていただくことを手がけていきたいと思つています。

このあいだ、総務省の地域人材ネットに登録されている青澤正樹さんとZoomで会議をする機会がありました。青澤さんは地域人材ネットで食のアドバイザーをされていて、「できればミシユランの星をとつている店にノウフクJASの商品を使つてもらいたい」という話をしたら、「それはシェフの意向もあるからな。服部幸應先生のいた調理師専門学校だつたら紹介できる」という話があつて、「もし服部栄養専門学校に食材として農福の商品をおるせれば、生徒が卒業したあとは全国各地に旅立っていくので、全国へ普及するのではないか」と、そんなおもしろい提案をいただいて。それから仲間に「みなさん、どういふ食材を出せますか」と早速やつて、「農福」にさらに「食」も加えたいと考えています。

中村 いまのミシユランの話の関係でいうと、フランス・パリのミシユラン三ツ星レストラン「ピエール・ガニエール」でスーシェフ（副料理長）をしていた日本人シェフのルーツ



が鹿児島で、一時期うちの職員だったんです。料理の世界も激烈な競争があつて、けっこう病んでいる職員さんがいらつしやるようです。その「ピエール・ガニュール」のスーシェフも体調を崩して、両親の故郷・鹿児島で療養中に、ご縁があつて、私の部下として、ものづくりの監修をしてもらつたり、アドバイスをもらつていました(笑)。そのときに生まれたオーガニックソーセージがありまして、単に農福の商品ということではなくて、シェフによつて「農福」の商品に、「食」が入った取り組みです。

この取り組みを知った市場サイドからサンプル要請があつたりして、期間限定にはなるんですけど、私たちのオーガニックソーセージが大阪・関西万博で食材として参加することになって、問い合わせが各地から来るようになっていきます。

畜産に関してはそういったことができるんですけども、お茶はなかなかそういった市場の開拓が難しく、抹茶がようやく海外から引き合いが来るようになってくれています。従来型の急須で入れて飲むリーフティー文化が日本では壊滅的な状態で、ここを何とかしたいという思いがありますが、単にエシカル商品というだけでお茶の需要を喚起するのは、なかなか難しいなと思っています。あの手この手で付加価値をつけて、市場に流通させられるように、いま模索をしています。

福祉で農業の本質的な価値を見つめ直す

生源寺 最後に、本日みなさんのお話を聞いて、農福連携の取り組み、あるいは取り組み



みに関わることに、さらには農業そのものについて、これまでと違うアイデア、感覚をみなさんがお持ちになられたのではないかと思います。そのあたりについて、お話を聞かせていただければと思いますが、いかがでしょうか。

岡村 私は、疾患のある方とか障がいのある方のケアに農業はとて有望だと思っています。農業って、人の一番本質的なところにあつて、人類は農業を1万年ぐらいしているんですよ。工場で働きたしたのはここ100年くらいだし、情報空間で働きたのはここ10年ぐらいなんです。たとえば認知症の人で認知が低下しているとき、こういう世界で生きているなら幸せかと考えると、違う考えの人もいますが、私は工場で作業してもらうとか、オンラインゲームをするとかはナンセンスで、やっぱり昔からずっとやっている、人間のDNAに組み込まれている作業をするのが自然だし、幸せだと思っています。

特に終末期、死を前にした人を、「ホスピスでどうやってケアするか」と考えた場合に、しみじみ話をして安らかになつてもらうのもいいんだけど、亡くなることは避けられませんか、そういう悩みつてなかなか消えないと思うんです。私は、弱つてきて死が近くなつたら、農作業でもしていればいいんじゃないかと思つてます。自分はそうしたいんです。酷使されるのはいいですけど、ほどほどに働いて、汗を流して、「死んじゃうんだ」とか、「いやだな」とか、余計なことは考えずに、最後は普通に旅立っていくのがいいんじゃないか思っています。

そういう意味では、最も人間らしい姿を取り戻せるのが農業だと思うので、ものすごく訴求性があると思うんですよ。そういうことをもつと広げて、みんなにわかつてほしいなと



いう思いがありますね。

生源寺 中本さんはどうでしょうか。

中本 ちよつと岡村さんと重なるところがあるかもしれないんですけど、私は農学を学ぶ前は全然違うことをしていたんです。じつは短大でピアノを専攻していて、そこで音楽療法を勉強していたんです。音楽療法とか園芸療法とか、いろいろなセラピーを学んできたなかで、自分もなぜ最後に農業を選んだのかと考えると、やっぱり食べるものができるということが一番の魅力だったんです。さっき「食」とおっしゃっていたんですけど、食につながるということでは、全員共通だし、何にも変えがたい行為なので、食べることにつながる農業をやることは、農福連携の取り組みのなかでも一番重要な要素かなと思っています。

生源寺 森下さんはいかがでしょう。

森下 生きづらさを感じている方たちにとってはもちろんですが、そうでない人にとっても農業は可能性があると思っています。たとえばりんごの剪定作業をするとき、先輩方に手伝いに来てもらうと、どんなにがんばってきた人でも「おれはまだ50回しか剪定していないよ」というんです。剪定は、1年に1回しかやらない作業なので、農業を50年やってきた方でも、50回しかやっていないから、結果がどうなるかわからないというんですね。枝を切ることによって、その栄養分で別の枝が伸びてくれるだろうと想像しながら切っていく。よく先輩から「りんごと会話をしろ」と言われたんですよ。「最初は、このおやじ、何を言っているんだ」と思っていたんですけど、実際にやっていると、「ここを切るから、こっちに伸びてくれ」と願いながらやっていて、自分自身も農業が楽しいんですね。



自分が楽しいということは、もしかしたら携わってくれている人も楽しいと思ってくれているのかなという意味で、生きづらさを抱えている人だけじゃなくて、そうでない人にとっても農業は可能性のあるものなのかなと思っています。

生源寺 中村さんはいかがでしょう。

中村 花の木農場はとにかく広いものですから、その広さを生かして生産量を追求した従来の農福連携では、働く方たちにきつい労働を強いることになりかねないので、その方向にはいきたくないという思いが強くなります。今後、どうしていくのがいいんだろうとずっと考えていて、去年あたりから、「体験と交流」を花の木農場の価値にして、学びの農場にするのはいかがでしょうか。

子どもがさまざまな仕事やサービスを体験して、社会のしくみを学ぶ「キッズニア」を既存じかと思うんですけど、花の木農場を農福版のキッズニアにするイメージです。日々、そこで生産活動をしている障がい者の仕事は、働く彼らにとっては仕事だけれども、子どもたちにとっては未知の体験の場となります。障がいがあったり、生きづらさを抱えていたりしても、ものづくり、農業を教えてくれる人と、体験を通して交流することで、子どもたちはすんなりと受け入れることができると思います。

地域が衰退していくなかで、お金は大事だと思うんです。ですが、貨幣経済だけに流されない経済システムが地方においてできるとしたら、交流・親交を生みだすきっかけの体験というところにあるんじゃないかなと思っています。これから花の木農場をそういう農場にしていけるように取り組んでいきたいと思っています。



生源寺 いま私からみなさんに問いかけたことについて、私自身の感覚を申しあげますと、植物、動物という生き物を育てる営みである点では、農業はある意味では子どもを育てる、あるいは学生を教育することとかなり重なる面があると思うんです。私は大学の教員を長くやってきましたけれども、若者はそれぞれ個性的ですが、記憶に残っているのは、何か問題を起こした学生で、何とか立ち上がって回復したというケースだと思っています。

農業の価値については、「農業の多面的機能」という表現があるんですね。これは国土の保全とか水源の涵養とか良好な景観の形成などを掲げているわけです。これはこれでももちろん大事なんですけども、いずれも農業の副産物なんですね。もう一度農業そのものの価値というか、本質に向き合ってみる必要があるのではないかなという気がしています。「農福連携」を広い意味で使わせていただきましたが、これは副産物ではなくて、農業の本質的な部分の価値をもう一度見直すきっかけになるのではないかとの気持ちになりました。今回の座談会の準備を進め、本日のお話をうかがったことで、本質を実感することになったという思いがあります。

このあたりで今回の座談会は終了させていただきます。長時間どうもありがとうございます。

(2025年9月17日開催)



農園型障害者雇用は農福連携か？

村木太郎

企業には社員の一定割合（法定雇用率）以上の障害者を雇用することが法律（障害者雇用促進法）で義務づけられている。雇用義務の対象は当初の身体障害者から知的障害者、精神障害者と拡がり、法定雇用率も2017年の2.0%から2024年に2.5%と上昇し、2026年には2.7%となる予定である。このため障害者雇用を増やすことに腐心している企業も多く、その間隙に登場したビジネスが農園型障害者雇用である。このビジネスは雇用代行サービス、雇用率ビジネスなどとも呼ばれており、企業内で働く従来の障害者雇用とは異なっており、事業者が企業に代わって農園（あるいはサテライトオフィス等）を用意し、障害者はそこで働く。しかし、雇用契約は企業と結ぶので、企業は自社の雇用として雇用率にカウントできる（図1参照）。2024年末の厚生労働省の集計によると、2000近くの事業所を2000近くの企業が利用し1万人近くの障害者が働いており、1年半の間に事業所数、就労障害者数とも約3割増加している。

このビジネスについては、「雇用率達成が目的、障害者雇用の丸投げ」といった批判が多くあり、国会でも障害者雇用促進法改正の際に「いわゆる障害者雇用代行ビジネスを利用することがないよう、事業主への周知、指導等の措置を検討すること」とした付帯決議がなされた。一方で事業者は「企業が雇用しているので雇用代行ビジネスには当たらない」「障害者雇用の拡大に寄与している」と主張している。そこで、事業の実態を調べるために



（一社）ダイバーシティ就労支援機構 理事長
（NPO）就労継続支援A型事業所全国協議会 理事

村木太郎（むらき たろう）

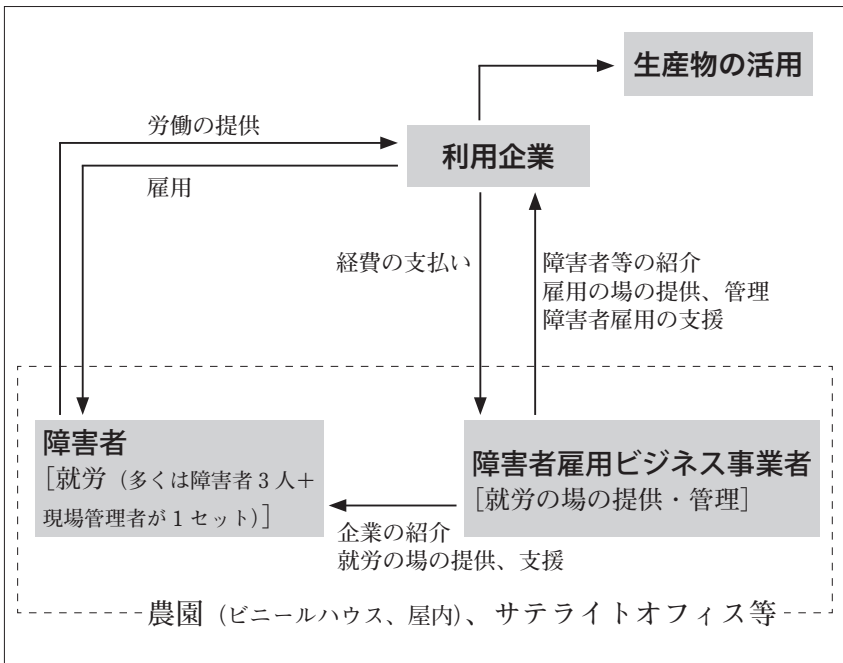
1954年北海道生まれ。1978年京都大学大学院工学研究科修士課程修了。同年労働省（現厚生労働省）入省。東京労働局長、総括審議官等を歴任後、2013年退職。企業、公益法人、大学研究所の勤務を経て、現在は障害者や若年女性を支援するNPO等で活動。

2023年に「農園型障害者雇用問題研究会」と「雇用率達成支援ビジネスを通して考える障害者雇用問題検討会」の2つの研究会が立ち上げられ2024年に報告書がまとめられた。筆者は両方に参加していたことから、両方の報告書のエッセンスをまとめて報告する。

障害者、利用企業等に対するアンケート調査では、就労者の満足度は利用企業が考えるより低いこと、すぐできる仕事が多く研修はほとんどないこと、昇級や配置転換もほとんどないことなどがわかった。また、現場の管理者には障害者支援スキルや合理的配慮義務の知見が必要とされるが、そうしたスキル・知見を持たない管理者が多く、研修等もほとんど行われていなかった。

成果物は社員や福利厚生施設への提供、持ち帰りが多く、外部販売はほとんどなかった。外部販売がないので総じて地域との関わりは

図1 障害者雇用ビジネスの仕組



資料出所 日本農福連携協会「農園型障害者雇用問題研究会報告書」を基に村木が作成

薄い、一部の事業では成果物が子ども食堂等に寄付されていたり、（農園作業ではなく）農家への支援（援農）を業務とする例もみられ、これらの場合は一定程度地域に貢献しているともいえる。

アンケート調査に加え現場調査を行い、それらに基づき事業のメリットと問題点を整理すると、比較的大きな企業による雇用、最低賃金以上の賃金などの障害者の労働環境の改善や、重度の障害者等の雇用の拡がり、障害者雇用のノウハウを持たない企業や地方における雇用といったメリットがある反面、生産物は持ち帰りや無料配布など価値が認められておらず、働く意味があいまいで、雇用そのものが目的となっていること、利用企業にとって遠隔地での雇用となり、雇用管理責任がおろそかになりがちであること、障害者の成長ややりがいの発揮の機会が閉ざされていること、現場管理者の研修・育成が不十分で

表 1 障害者、利用企業のメリットと問題点

メリット

- ①比較的大きな企業に採用され、賃金は最低賃金以上。
- ②知的障害者、精神障害者や重度の障害者の雇用の促進。
- ③障害者雇用のノウハウを持たない利用企業や地方でも容易に雇用。

問題点

- ①雇用そのものが目的化して、生産物に価値を認めていない（販売はせずに持ち帰り、寄付、社員に配布）。
- ②障害者が成長機会ややりがいを持ってない。
- ③利用企業の雇用管理が不十分で事業者にお任せ。
- ④人材育成等キャリアプランがない。
- ⑤利用企業の努力・工夫の余地がない。
- ⑥現場管理者に支援や合理的配慮の知見がなく、研修・育成も不十分。

日本農福連携協会「農園型障害者雇用問題研究会報告書」及び雇用率達成支援ビジネスを通して考える障害者雇用問題検討会「サテライト型（農園型含む）障害者雇用に関する調査研究報告書」に基づき、村木が整理

あること、などメリットに倍する問題点が指摘された（表1参照）。

こうした点を踏まえ、両研究会の有志で2024年6月に厚生労働省に提言を行った。これではまず、①利用企業が遠隔でも適切な雇用管理ができる仕組とする、②障害者の能力開発、キャリア形成についての利用企業の責任を明確にし、適切な仕組とする、③直接の管理者（農場長等）の職務及び必要な資質を明確にし、育成や評価の仕組を作る、④障害者も利用しやすい苦情処理制度を設置する、などを内容とする事業者及び利用企業に対するガイドラインを策定し指導することなどを提言している。加えて、雇用率が量的評価にとどまっていることがこの問題の根源であることから、雇用率について質的要素の加味などの見直しを行うことも提言している。この事業は法律上は必ずしも違法とはいえないことから、厚生労働省は規制を強化する動きをみせていないが、企業による障害者雇用という本来の理念からは外れているものであり、問題点も多く、ガイドラインの設定等による指導の強化が望まれる。

【参考資料】

*日本発達障害連盟…発達障害白書2025

*日本農福連携協会…農園型障害者雇用問題研究会報告書

*雇用率達成支援ビジネスを通して考える障害者雇用問題検討会…サテライト型（農園型含む）障害者雇用に関する調査研究報告書

ジェンダード・イノベーションが導く社会

相川 頌子

8月4日（月）、お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所は、大阪・関西万博のウーマンズパビリオン「WA」スペースにおいて、「知れば知るほど納得！ ジェンダード・イノベーション」で講演とパネルディスカッションなどを開催した。ジェンダード・イノベーションとは、積極的に性差および交差性^①に基づいた解析を研究・開発に組み入れることで、知の再編成を促し、イノベーションを創出することである。本稿では、ジェンダード・イノベーション（以降、GI）がどのような価値を生み出し、社会を導いていくのかに焦点を当てながら、同イベントの実施内容を紹介する^②。

第1部の講演では、石井クンツ昌子研究所長が、GIの概念、国内外の研究・開発の事例、今後の課題を解説した。既存の研究・開発は主に男性が担ってきたため、無意識のうちに男性を基準として進められ、性差が見過ごされてきた。そして、性差を見落とした研究・開発は、女性だけではなく、男性にも不利益を生じさせてきたのである。GIは、世界中の人々の多様な幸せ（Well-being）を実現しつつ共生できる社会の構築に寄与する。研究所長からは、GIの推進には、1人ひとりの生活者としての気付きが不可欠であり、日常生活をGI視点で振り返ってみてほしいとのメッセージがあった。

第2部のパネルディスカッションでは、研究所長を進行役として、斎藤悦子副研究所長、



お茶の水女子大学 ジェンダード・イノベーション研究所
特任講師

相川 頌子（あいかわ しょうこ）

山形県生まれ。専門は家族社会学、ジェンダー研究。2020年、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科ジェンダー学際研究専攻（博士後期課程）修了。博士（社会科学）。直近の研究テーマは、ジェンダー規範の定量的な測定と無償労働の男女間不均衡の解消。お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー、ジュネーブ国際・開発研究大学院ジェンダーセンター客員研究員などを経て、2024年8月より現職。

伊藤貴之教授、藤山真美子准教授が、GI視点を組み入れた研究の結果と成果について議論した。これまでの研究の結果として、斎藤副研究所長が、料理行動の男女差を明らかにし、家事という生活スキルを身に付けていることが、男女ともに生涯、健康で自立した生活を可能にすると述べた。伊藤教授は、空調温感の男女差を分析し、女性は男性に比べて温度感覚の調節が難しく、女性の体質に配慮した空調の設計が必要であることを示した。藤山准教授は、トイレ空間がジェンダーや障害などの包摂性に関する課題を多数抱えていることを指摘し、標準的な人物像ではなく、利用者の具体的な行動や状況を考慮しながら空間を設計することの重要性を語った。

つぎに、生活経営学、情報学、都市・建築学と、パネリストの専門分野はそれぞれ異なるものの、研究手法や対象の拡大、新たなモノ・コト・サービスの着想、単なる分析にとどまらない社会実装や包摂的社会的実現に向けた取り組みが、研究の成果としてあげられた。またGIを起点として、多様な専門分野の研究者が集い議論を交わしたことで、新たな研究課題が発掘され、共同研究を実施したり、共同セミナーを開催しているという。



大阪・関西万博での「知れば知るほど納得！ ジェンダード・イノベーション」のパネルディスカッションの様子 左から、石井クツツ昌子お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所長、斎藤悦子副研究所長、伊藤貴之教授、藤山真美子准教授。（写真は本学の広報・ダイバーシティ推進課撮影）

第3部のプレゼンテーションでは、高丸理香特任准教授の進行のもと、2025年度前期に「ジェンダード・イノベーション入門」を履修した学生が、日常生活で感じた疑問や課題に対して、以下のような、GI視点での改善・解決策を発表した。

①ビジネスの場で発言する女性が少ないという課題に対し、女性の自己肯定感を上げることで発言量を増やすホメホメシール帳。

②女性の「空間認知の苦手意識」「運転への不安」「移動回数が多く距離が短い」という移動特性を考慮したナビアプリ。

③男性の肌は紫外線感受性が高いにもかかわらず、日焼け止め使用率が低いという現状に対し、冷感効果によって煩わしさを解消し、焼きたいという希望も叶える男性向け日焼け止め。

④夜道の安全は女性が気をつけるのが当然という自己責任論によらない、街灯や人流に配慮した都市設計。

⑤女性に偏りがちな家事負担をスキルの見える化×感情の共有×達成の喜びにより解決する家事アプリ。

⑥女性トイレの長蛇の列解消に向けた、女性トイレ総数の増加、個室利用時間の削減案。最後に、第4部では、本研究所で翻訳・出版を行った「交差性デザインカード」とワークショップについて、吉原公美URA (University Research Administrator) より説明があった。交差性デザインカードは、ロンダ・シービンガー教授たちのチームにより2021年に出版された「Intersectional Design Cards」の日本語訳である。交差性要素の定義のカード12枚、



デザイン検討のための問いのカード12枚、事例研究のカード16枚とカードの使い方が記載されたガイドブックで構成され、多様性や包摂性の理解を深める教材としても活用できる。これまで産学交流会や自治体にて、交差性デザインカードのワークショップを複数回実施したところ、参加者からは、G Iの意義が理解できるようになったとの声があった。

このようにG I視点を研究・開発に取り入れることで、新しい製品、プロセスやサービス、ビジネスチャンスの創出、多様性の確保と持続可能性の強化、D E I（多様性、公平性、包摂性）や女性のエンパワーメント推進が期待できる。G Iは、これまで不利な立場に立たされてきた女性のみが対象と考えられがちであるが、世界中の人々の多様な幸せを実現し、あらゆる人々が尊重される社会の構築に貢献するのである。本研究所では、G Iの普及に向けて、公開イベント、研究所長・副研究所長による講演、高校生向けの出張講義を実施している。ぜひホームページ (<https://igi.cf.ocha.ac.jp/>) よりお問い合わせいただきたい。

【注】

- (1) 定義については、ジェンダード・イノベーションとは？ (<https://genderedinnovations-ochanomizu-univ.jp/what-is-gendered-innovations.html>) を参照のこと。第一生命財団(2023)「ジェンダード・イノベーションとコミュニティ」『コミュニティ』171, pp13-69もあわせてご覧いただきたい。
- (2) 本稿は、筆者が執筆した大阪・関西万博「知れば知るほど納得！ ジェンダード・イノベーション」の振り返り、会期後の取組みに加筆・修正を加えたものである。



人と社会がつながり直すためのテクノロジー

鳴海拓志

電話や無線から出発し、メールやインターネット、ソーシャルネットワークサービスの利用が当たり前となり、最近ではメタバース（多人数が同時接続してコミュニケーションできる三次元バーチャル環境）も一定の利用者を獲得している。人と人をつなぐテクノロジーは扱える情報を増やしながら大きく発展し、遠くの人々や出会えなかった人々の間に新しいつながりを作り、新たなコミュニティの形成に寄与してきた。

人と人をつなぐテクノロジーは、新たな関係の構築のためだけでなく、既存のコミュニティ内部でも用いられる。そのような場合に、テクノロジーの種類が変われば、その特性に応じてコミュニケーションやつながりのあり方が変化する。これまでのコンピュータを媒介するコミュニケーションの研究は、テキストベースのコミュニケーションでは対面会話よりも自己開示が増えることや、聴覚や発話に障害があってもそれらが問題にならずコミュニティに参加しやすくなることなどを示してきたが、テクノロジーがテキストだけでなく音声や画像・動画、身体的コミュニケーションまでも扱えるようになってきたことで、現在ではそれらの要素がコミュニケーションのあり方にどのような影響を与えるかが盛んに探究されるようになってきている。

こうした性質は、エコーチェンバー（似た考え方や価値観を持つ人々との交流で特定の意



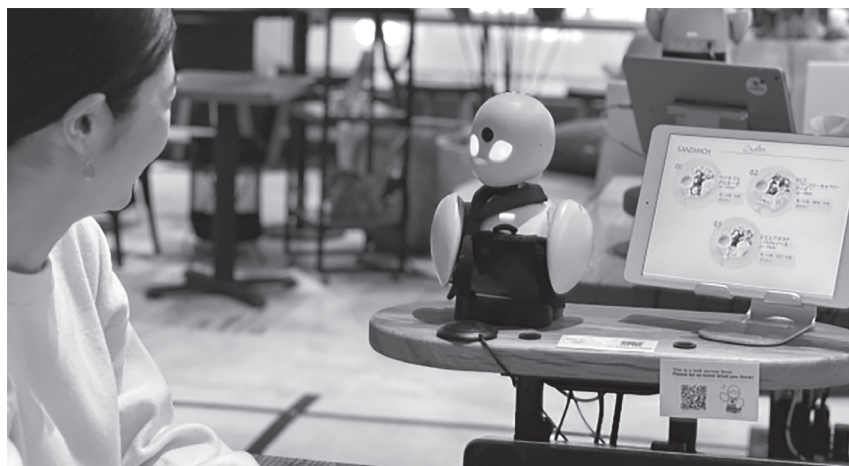
東京大学大学院情報理工学系研究科准教授

鳴海拓志（なるみ たくじ）

2006年東京大学工学部システム創成学科卒業。2008年東京大学大学院学際情報学府修了。2011年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士（工学）。バーチャルリアリティ技術と認知科学・心理学の知見を融合する研究に取り組む。文部科学大臣表彰若手研究者賞、日本バーチャルリアリティ学会論文賞、文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門優秀賞など、受賞多数。

見や価値観が増幅する現象)などの現在起こっている社会問題の要因になっている。一方で、これをポジティブに活かすことができれば、コミュニケーション内で固定化された関係や、無意識の偏見などを解きほぐし、既存のつながりのあり方を変えることができる可能性がある。本稿では、コミュニケーションの中の今あるつながりを見直し、よりよく「つながり直すためのテクノロジー」について、特に筆者が中心的に研究してきたバーチャルリアリティ(VR)やメタバースなどの身体性を扱うテクノロジーを例に考えていく。

東京・日本橋にある「分身ロボットカフェ DAWN ver.β」は、つながり直すためのテクノロジーの実践の好例といえる。ここでは身体障害等を抱え外出困難な人々が、遠隔操作可能なロボットアバターを使用してカフェでの接客にあたっている。ロボットは大型のものと卓上サイズのもの2種類があり、卓上サイズのロボットは主にコミュニケーションのために用いられ、客から注文を取ったり、料理が提供されるまでの間、客と会話するために用いられ、大型のロボットは給仕のために用いられている。ここで働く当事者たちへのインタビューは、ロボットアバターを使ったコミュニケーションでは当事者の身体特性が覆い隠されるために、当事者間でも、当事者と健常者間でも、健常者同士に近い対等な関係のコミュニ



ロボットカフェで働くロボットアバター (小型) 操作者は卓上に置かれた小さなロボットアバターを介して、客から注文を取り、会話をする。

ケーションが起ることを明らかにした。それだけでなく、そうした経験を通じて、当事者の中でそれまで周囲の他者から位置付けられていた自らのアイデンティティ（例：障害者、働けない人）の解体や障害に対する認識の変化が起り、社会参加への意欲や将来に対する明るい展望が生まれていた。アバターという空間を超えて身体的なコミュニケーションを実現するテクノロジーが、あえて実際の身体とは異なる特徴を持つように利用されることで、過去の経験に基づいて築き上げられた人と人、人と社会の関係を再構築する役割を果たしたのだと考えることができる。

他方、ロボットアバターでの社会参加経験を十分に積んだ当事者の中には、より自分らしく社会に受け入れられたいという願望を持つ者も現れていた。そこでわれわれは、身体性の違いを覆い隠すロボットアバターに加え、各個人の個性を表現できるバーチャルアバターを店内の大スクリーンに表示されたメタバース空間に表示して接客のために併用できる「拡張アバター接客」システムを開発した（86ページ写真）。当事者とともに、自らを社



客を出迎えるロボットアバター（大型） 大型ロボットアバターは主に客へ料理を運ぶために用いられる。

会の中でどのように位置づけたいかを検討してバーチャルアバターを作成し、実際に1ヶ月超、このシステムを使って接客してもらう社会実験をおこなった。

その結果、バーチャルアバターでの自己表現は社会の中で自らをこう捉えて欲しいというアイデンティティの宣言として強く機能し、客や他の従業員との交流の中で宣言されたアイデンティティが社会的に位置づけられることで、当事者のアイデンティティが更新され、ウェルビーイングが向上することが示唆された。身体的障害の観点だけでなく、ジェンダー違和を感じる参加者にとっても、新たな身体性のもとの社会的交流が効果的に働くことが示され、このようなシステムによって多様な立場の人々が他者や社会とつながり直すきっかけを提供できることが示唆された。



遠隔で接客にあたる人たちとそのバーチャルアバター メタバースプラットフォームである cluster を介して、パソコンやタブレットからカフェのスクリーンに映るアバターを操作している。それぞれのアバターは操作者がどのような姿で他者や社会との関わりを持ちたいかに応じてデザインされており、それぞれの個性が表現されている。

「拡張アバター接客」システム



カフェのスクリーンに映るバーチャルアバター（アニメ調のキャラクターとアルパカ）とカフェで接客を受ける人たち 料理が提供されるまでの間、バーチャルアバターを使って客と会話をしながらバーチャル環境でクッキーを焼き、客の選択に応じてクッキーにスタンプが押される。バーチャル環境でクッキーが完成すると、現実でも客に同じスタンプが押されたクッキーが提供される。



バーチャルアバターを操作する人から見たバーチャルの環境 バーチャル上の壁面にカメラで撮影したカフェの様子がリアルタイムに映し出されているため、これを見ながら客と違和感なくコミュニケーションができる。

VR分野では、VR内で特定の立場の人の経験を追体験させることで、そのような立場の人への共感を高めるVRパースペクティブテイキング*（VRPT）が研究されてきた。前述のAvatar接客が、身体特性を変えてのコミュニケーションでつながり直すきっかけを提供したように、VRやメタバースを利用して身体・社会的立場・内的経験などを他者と交換した上で当事者とコミュニケーションできる場合は、同様のきっかけを提供しうる。

例えば、「子育てをしながら働くワーキングペアレントとその周囲の人の経験を再現したVRPTと、立場の異なる人同士の対話を組み合わせたダイバーシティ研修」の研究（88ページ写真）では、VRPTを通じて職場の構成員全員が多様な当事者視点の経験を持つことで皆が働きやすい職場のあり方の議論が空論になりにくいことや、VRという共通経験との比較を通じて自己開示をしやすくなること（例…「VRに出てきた子はおとなしい方で、うちの子は〜」といった開示）によって、より働きやすい職場環境構築が支援されることが示唆された。

同様に、幻視や幻聴を体験する人々の体験をVRで再現して共有する研究では、これまでに言語的に幻視や幻聴の体験内容を共有されているコミュニケーション内であっても、VRによる体験共有は身体的実感を強く与えるために相互理解を深めること、そうした相互理解の深化が当事者と幻視・幻聴の関係を改善する可能性があることが示唆された。

ある当事者の家族は、当事者が体験する現象を言語で説明されても理解できず、話することさえ避けている状態であったが、VRでの体験共有を通じて体験がやっと理解できたといい、それをきっかけに当事者と積極的に話をしたいと考えるようになっていた。職場や家

【パースペクティブテイキング】
他者の見ている視点（パースペクティブ）を、自分のなかに取り入れる（テイキング）こと。



子育てをしながら働くワーキングペアレンツの体験を再現した VRPT コンテンツの 1 シーン このコンテンツでは、最初に上司視点の体験が与えられる。子育て中の部下が子供を迎えにいくために先に帰宅するが、その後に重要な取引先から、その部下にしか対応できない仕事に至急対応するように連絡を受ける。そこで、帰宅した部下に連絡し、至急の対応を依頼する。次にシーンが変わり、体験者は先ほど帰宅した部下になっている。家で子供に食事を与えていると、上司から緊急の仕事の依頼が入り、子供の隣で対応しようとするが、子供が水を求めたり、食事をこぼしたりするために思うように仕事を進められない。写真は部下視点の体験の 1 シーン。異なる 2 つの立場の視点を体験することで、子育てにまつわる葛藤を立場を超えて実感できるようになっている。



VRPT コンテンツを利用したダイバーシティ研修 子育て中のメンバーがいるチーム全員で研修に参加してもらい、まずは順にヘッドマウンテッドディスプレイを装着して VRPT コンテンツを体験する。その際、お互いの体験の様子を観察し、助言を与えたり、気付いたことなどを記録したりする。その後、体験の感想や気付いたことなどを踏まえて、子育てをしている人もその周囲も働きやすい職場環境はどのようなもので、自分たちに明日から出来ることは何かを検討してもらう。

族において確立された人間関係に変化をもた
らすことは容易ではないが、テクノロジーは
そのような間柄でさえもつながり直すきつ
かけを与える。

ここまで紹介した例は、障害のような特殊
な状況に置かれた人々を対象としたものが多
い。しかし、人は誰しも異なる固有の経験を
持ち、社会の中でこうありたいというそれぞ
れの思いを持っている。インターネットが専
門家のものから一般にひらかれた形になり社
会を変えたように、前述してきたようなつな
がり直すためのテクノロジーも、誰にとつて
もひらかれた可能性を持ち、社会にインパ
クトをもたらさう。そうした考えのもと、「人
生経験交換メタバース」というプロジェクト
も始まった。

このプロジェクトでは、さまざまな人の人
生のターニングポイントとなった経験を再現
したメタバース空間を共有・追体験できる環

人生経験交換メタバース

さまざまな人の人生のターニングポイントとなった経験を
メタバース空間に再現し、他の人と共有可能にする。



さえさんの人生経験を再現したメタバース空間 旅行が好きで海外を飛び回っていたが、病気の発症により外出が困難になった経験を、旅行の思い出の写真が飾られた海外風の庭園と、それを抜けた先の建物の中の白黒の部屋の中に閉じ込められる体験として表現。その後、分身ロボットカフェでロボットアバターを介した就労にあたることで社会とのつながりを取り戻していき、未来に希望が持てた経験を、白黒の部屋が崩れて現れる、彩りのあるカフェの空間とその出口越しに見える輝いた海の景色として表現。写真は、そのメタバース空間を本人（左のアルパカアバター）と配偶者（右のハットをかぶったアルパカアバター）が一緒に体験しながら過去を振り返っている。

境を作ること、他者との経験の共有と本人にとっての経験の再解釈を促し、自己理解や他者理解が深められる場を生むことを狙っている。自分の経験を身体的に追体験できる形で気軽に共有できる環境がどのような可能性を持ち、他方でどのような悪影響を生みうるのか、今はまだ定かではない。こうした実践を通じて、多くの人が社会の中でよりよくあれる世界を作るための「つながり直すためのテクノロジー」のあり方を見出していきたい。

(関連リンク)

人生経験交換メタバース： <https://cluster.mu/w/735d5188-06ba-4bc9-9adb-d09044aaf16e>



はぐさんの人生経験を再現したメタバース空間 小さい頃に両親と生き別れ、過酷な生活を送りながら大人になり、現在はメタバースで歌い手活動をする中で、母に対する気持ちと過去の経験が整理された経験を再現。母を歌った歌の世界を表現したインタラクティブなミュージックビデオのような空間になっている。写真は、そのメタバース空間を本人（左の女性アバター）と実の母親（右の猫アバター）が遠隔から一緒に体験したうえで、最後のシーンにおいて、はぐさんから「お母さんって呼んで良いですか？」と問いかけ、親子の関係が再構築される兆しが見られた場面。

【助成施設訪問】 幼保連携型認定こども園たんぽぽこども園

大阪府堺市にある〈幼保連携型認定こども園たんぽぽこども園〉には総額約100万円を助成。同園は助成金で、茶碗や帛紗びくしや、茶筌ちしきなど、茶道に使う道具を購入した。

〈幼保連携型認定こども園たんぽぽこども園〉の竹田和恵園長は、「日本文化の一つである茶道を通して子どもたちの〈心〉と〈身体〉を育てたい」という。

「私は28年間、外国で仕事をしてきましたが、母が運営していた保育所を受け継ぐにあたって、外国から日本を見てきた私は、日本の素晴らしい文化を子どもたちに伝えたいと思いました。日本文化もさまざまですが、堺市は茶道の祖の千利休の故郷です。この堺市に新設する園ですから、茶道を保育に取り入れることにしました」

そこで、竹田園長が「来年開園する園にお茶室をつくって、子どもたちに茶道を学ばせたいんです。茶道の指導に来ていただけませんか」と相談したのが、茶道裏千家淡交会堺支部・師範の中沢尚子さん。中沢さんは、裏千家で約30年間活動を続けており、その間、堺市立の小学校や中学校などに出向き、生徒たちに茶道を教えてきた。いまは、市内の幼稚園や保育所で教えるかたわら、「さかい利晶りしょうの杜もり」で一般の方たちにお茶を振るまい、お茶に親しんでもらう活動を行っている。「さかい利晶りしょうの杜もり」は、堺にゆかりのある「千利休」と「与謝野晶子」をテーマに堺の歴史や文化を発信する文化施設だ。

同園は、園舎の設計段階から中沢さんに参加してもらい、茶室の配置など、茶道を教えや

【幼保連携型認定こども園たんぽぽこども園】

大阪府堺市北区。社会福祉法人たんぽぽが設置する幼保連携型認定こども園。0～5歳の108人が通う（2025年10月現在）。

右からたんぽぽこども園・園長の竹田和恵さん、茶道裏千家・師範の中沢尚子さん。



すい環境を整え、2023年4月に幼保連携型認定こども園として開園した。

同園の茶道教室は、4歳から毎月1回、卒園するまでの2年間で24回行う。教え方や内容は大人に教えるときと同じだ。

「ただ、子ども相手ですので言葉選びや伝え方には気を遣っています。子どもは思った通りに動かないこともありますが、根気強く教えています」と中沢さん。

同園を訪れた日は、5歳児の茶道教室があった。

はじめに、折りたたみ式の畳を敷いたランチルームでお辞儀・挨拶を行い、師範の話を聞き、お点前^{てまえ}を見せてもらう。

それから茶室前に移動し、扇子を手に持ちひとりずつ茶室へ入る。茶室では、師範と一緒に床の間の軸や花を拝見し、おもてなしの心を受けとる。その後、季節のお菓子と抹茶をいただくという流れだ。

現在では畳の部屋がない家も増えた。慣れない畳にはじめの頃は、じつと座ってられない子どももいたそうだが、この日は、一つひとつの作法をしつかり学ぼうとする子どもたちの姿や、真剣な表情が印象的だった。

「4歳から茶道を学んできて、正座もかなり長くできるようになっていますし、少しずつですが、協調性や共感性、相手を思いやる心など、子どもたちの〈心〉の成長を感じます。保護者からも〈事前準備をするよ



茶室で茶道の作法を学ぶ子どもたち 上の写真は、茶室に入るときの作法「にじる」で、正座をしたまま両脇に手をつき、膝から下を畳につけたまま前に移動する。左は「床の間拝見」という作法で、掛け軸や季節ごとの花にもてなしの心を受けとる。

うになった」〈時間にゆとりを持って行動するようになった〉〈まわりの人に譲れるようになった〉といった声があります」

この茶道教室で使っている折りたたみ式の畳や茶碗、帛紗、茶筌などの茶道の道具が今回の助成対象だ。

茶道を教える中沢さんは、「茶道は〈敷居が高い〉とよく言われますが、そんなことはありません。日本にきた外国人はよく茶道体験をしています。もっと日本人にもお茶に親しんでほしい。ひとりでも多くの子どもが茶道を続けて、大人になったときに、お茶の美味しさ、楽しさを広めてくれたら嬉しいですね」と話す。

また、同園では地域の子育て支援活動でも茶室を利用している。地域で0～5歳の子どもを育てる親子を対象に、毎月1回ベビーマッサージや体操遊びなどを行っている。赤ん坊が横になるようなプログラムでも、畳敷きの茶室なら安心して活動ができる。

最後に竹田園長は、「9月の敬老の日には、地域の高齢者を招いてお茶会を行う予定です。お茶を通して、地域の高齢者と世代間交流します。それから、卒園のときには、子どもたちが保護者にお茶と桜のお菓子を振るまう予定です。2年間の成果を保護者に体験してもらいます。これから茶道という日本の伝統文化を大切にして、地域に愛着を持つ子どもたちを育てていきたいです」と語る。



茶室でお茶を飲む子どもたち 子どもたちは畳に正座し、茶碗をまわして作法通りに抹茶を飲み干す。子どもには苦い抹茶も薄めないで出しているという。

二つの教室、二つの風景——私のジェンダー教育の軌跡

私の大学教員としての軌跡は、ほぼ男子校のような教室で、困難さを感じながらも、ジェンダーへの気づきが与える個人への影響力の強さを実感した前半と、現在の女子大の教室での学生たちの高い関心と知識をもとに、理解度と共感性の高い講義を行っている後半で成り立っています。

斎藤悦子

さいとう・えつこ

お茶の水女子大学
ジェンダー・イノベーション研究所
副所長



男子学生にジェンダーを教える

私は1997年3月に学位を取得し、同年4月に地方の経済系単科の私立大学へ着任しました。経済学部と経営学部からなり、学生は男子学生が8割ほど、教員の女性比率は5%という状況でした。こうした環境において、よくぞ「ジェンダー論」を4単位、1年間の開講科目にしようと考えてくれたものだと思います。当時、ジェンダーという言葉は、研究者の間で新しい概念として受け入れられ、使われるようにはなっていました。社会の中では全く未知の概念だったと思います。ほとんど男子校のような大学で、受講生が存在するのか不安でしたが、「ジェン

ダー論」の講義は、毎年、300人を超える学生が受講してくれました。

2001年に某雑誌に執筆した「男子学生にジェンダーを教える」という随筆を、今回、この原稿を書くことになったので読み直してみました。当時の私の問題意識は、ジェンダーへの気づきをいかに男子学生に促すか、ジェンダー問題は女性だけの問題でなく、男性にも関わることを理解させたいということでした。私もまだ30代でしたので講義の中でのいろいろなことを試してみました。例えば、グループワークとして、男性を女性が演じ、女性が男性を演じる寸劇を行ったり、映画「男はつらいよ」を鑑賞

してディスカッションを行ったり、コマーシャルの中で描かれるジェンダーを発見してもらったり、こうしたアクティブな講義を行う中で「ジェンダー論」の時間を楽しみにしてくれる学生もでてきました。学生たちが「生きづらさ」の原因がジェンダーに起因しているかもしれないと気づく瞬間や、性別を超えた連帯感を生み出した時に「ジェンダー論」の持つ奥深さや、この授業が個人の人生に与える影響力の強さを実感しました。最初は興味本位での受講だったかもしれませんが、「ジェンダー論」に耳を傾け、共に授業を作ってくれた学生たちに大変感謝しています。この大学で、私の教員人生の前半の14年間で過ごすことができたことをとても幸せに感じています。

女子大でのジェンダー教育

教員人生の後半は、現在の女子大学で進行中です。都心にあり、日本におけるジェンダー研究をリードしてきた伝統を持つ女子大学の環境は、前半の教員人生とは全く対照的でした。私が学生と関わる時の問題意識は、ジェンダーへの気づきではなく（学生たちは皆、ジェンダーには気づいていますので）、どのようにしてジェンダーを乗り越えるかに変わります。

した。昨今の学生たちの感覚では、高校までの教育の中で性差はほとんど認識したことはないようです。しかし、彼女たちは大学でジェンダーを学ぶ時、それが自分の人生や自分の将来にどのように関わるかを想像することによって、ジェンダーを理解しています。ですので、ジェンダーを教えるという意味では、現在の職場にいる女子学生の高い関心と理解度に支えられているお陰で、講義自体には以前のような苦勞がありません。女子学生は皆、ジェンダーの知識があり、非常に共感的です。ただ、最近、こうしたジェンダーへの高い理解が、もしかしたら思考の画一化を生じさせているかもしれない、それによりこの教室自体が同質性の高い場になっているかもしれないと思うことに遭遇しました。他大学が集まる研究大会にゼミで参加した際、ゼミ学生が常識と感じていた男女平等やジェンダー概念を他大学の学生たちになかなか理解してもらえず、戸惑い、驚いているのを目撃したのです。後日、学生たちはこの経験を、自分たちが将来直面するであろう社会を実感した瞬間だったと語りました。

二つの教室から見えてきたもの

私の大学教員としての軌跡は、ほぼ男子校のよう

な教室で、困難を感じながらも、ジェンダーへの気づきが与える個人への影響力の強さを実感した前半と、現在の女子大の教室での学生たちの高い関心と知識をもとに、理解度と共感性の高い講義を行っている後半で成り立っています。教育としては、断然、女子大でジェンダー論を教育する方が理論紹介やグローバルな動向に至るまで、多くの知識の提供が可能です。

しかし、最近、私が実感しているのは、これらの理論と実践、あるいは社会のギャップをどのように埋めたらよいのか、埋めるための教育はどのようにあるべきなのだろうかということになります。真に、私の目の前にいる女子学生をエンパワーするにはどうしたらよいのだろうかということです。

私がジェンダー概念を知った1980年代、私は自分に降りかかる現象を、ジェンダー概念を通してみることで納得し「個人的なことは政治的」であることを理解しました。2020年代のジェンダー教育は、納得や理解のためだけでなく、現実社会とのギャップを乗り越えるためのものにならなければいけないのではないかと思います、日々、模索を続けています。

【お知らせ】

コミュニティ173号（2024年11月発行）の記事「ヤングケアラーから考えるコミュニティ」（澁谷智子）の77ページに誤った記述がございました。訂正いたします。

【当該記事】

家事関連時間は専業主婦世帯でも年を追うごとに減っていて、5年前の「平成28年社会生活基本調査」と比べると、世帯あたりの家事関連時間は、専業主婦世帯では1時間13分、共働き世帯では29分減っている。

【訂正】

妻の家事関連時間は専業主婦世帯でも減っていて、5年前の「平成28年社会生活基本調査」と比べると、14分減っている。

BOOK REVIEW

ブックレビュー

大の里を育てた〈かにや旅館〉物語



著＝小林信也
四六判・並製・208頁
定価1980円(税込)
集英社インターナショナル
[目次より]
序章 能生町が人・人・人で
あふれた日／第一章 相模部
屋〈かにや旅館〉の誕生／
第二章 有望な少年たちが集
まり始めた／他

アマチュアの世界には、十代の少年たちと寝食を共にし、親代わりになつて力士を育てる「相撲部屋」がいまもある。その代表的な存在が、この物語の舞台である〈かにや旅館〉だ。かつて旅館だった名残でいまでもその名で呼んでいる。実体は、新潟県立海洋高校相撲部の寮。ここにはプロなら「親方」と呼ばれる立場の田海哲也総監督と、女将さんの恵津子夫人がいる。かにや旅館で育ったOB監督、東京から〈かにや〉を選んで来たコーチ、さらには、地域の人たちと力を合わせて、二人は十代の少年たちの夢を支え育んでいる。(はじめにより)

ジェンダーで学ぶ生活経済論

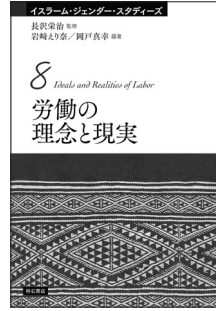


編著＝伊藤純、斎藤悦子
A5判・並製・248頁
定価3080円(税込)
ミネルヴァ書房
[目次より]
序章 生活経済を学ぶとい
うこと／第1章 資本主義にお
ける生産と消費／第2章 家
族・世帯、ライフコース―
その変化と今後の展望／他

本書は、家政学・生活科学系の大学におかれてきた「家庭経済学」、やがて経済学系の大学にも広がった「生活経済学」を扱うものです。本書のねらいは、生活とは何か、人間労働力(人間活動力)の再生産が私たちの暮らしの中でどのように行われているのか、社会・経済環境の変化によって生じる生活の変化に対し、私たち自身はどのように消費生活様式を選び取っていけばよいかという視点と生活経営力を身につけることにあります。

(序章 生活経済を学ぶということ)《本書のねらい》より)

労働の理念と現実



監修＝長沢栄治、編著＝岩崎えり奈、岡戸真幸
四六版・並製・272頁
定価 2750 円（税込）
明石書店

[目次より]

はじめに／第Ⅰ部 歴史と思想のなかの労働とイスラーム・ジェンダー／第Ⅱ部 ムスリム社会の労働の現実とジェンダー／他

本書は、2部で構成され、ムスリム社会における多様な「労働」のあり方を理念と現実の両面から明らかにすることを目的にしている。第Ⅰ部「歴史と思想のなかの労働とイスラーム・ジェンダー」は理念と歴史上の「労働」を扱う。イスラームの歴史において「労働」がどのようにとらえられ、どのような意味をもったのか、近代化のなかで「労働」概念がどのように形成されたのか、現代のムスリム社会において、「労働」が信仰とどのように結びついているのかを明らかにする。第Ⅱ部「ムスリム社会の労働の現実とジェンダー」では、ムスリム社会を対象にする研究者がそれぞれのフィールドワークをもとに、生活のなかで営まれるさまざまな「労働」に目を向け、「労働」の意味を考察する。（はじめにより）

データでみる県勢2026



発行＝矢野恒太記念会
A5判・並製・512頁
定価 3300 円（税込）

『データでみる県勢』は、地方の社会・経済の様子を明解に表した『日本国勢図会』の地域統計版です。第Ⅰ部「府県のすがた」では、各都道府県の概要を、主要データや人口ピラミッド、リーダーチャートで示すとともに、主な生産物なども掲載しました。また、地域の気になる事項に関する解説ページを加えています。第Ⅱ部「府県別統計」は、国土・人口、労働、産業、金融・財政、社会・文化など8つの章からなり、各都道府県を多様な統計で比較しています。第Ⅲ部「市町村統計」では、さまざまな指標についての市町村ランキングを紹介するほか、全市町村の主要統計もご覧いただけます。さらに、読者の方を対象に、第Ⅲ部の全市町村のデータを一覧できるエクセルファイルを矢野恒太記念会ウェブサイトにて提供しています。本書は電子書籍でも発行しています。

【編集委員】

石井クンツ昌子
猪熊 律子
岩崎えり奈
梅崎 昌裕
北奥 郁代
後藤 春彦
生源寺眞一
中村 高康

お茶の水女子大学理事・副学長
読売新聞東京本社編集委員室
上智大学教授
東京大学教授
第一生命財団常務理事
早稲田大学副総長・教授
東京大学・福島大学名誉教授
東京大学教授

【編集後記】

▼今号では、農業と福祉のつながりについて議論しました。「農福連携」は、これからの地域社会を考える上で大切な取り組みです。障がい者や生きづらさを抱える人たち、高齢者などと共に暮らす地域社会の新たな可能性を考えるきっかけになれば幸いです。

コミュニティ No.175 ……農業と障がい者福祉

2025年11月15日発行（年2回発行）

頒価 500円

編集・発行 一般財団法人 第一生命財団

〒102-0009 東京都千代田区平河町1-2-10

電話 03-3239-2312

制作 地人館（大角 修・佐藤修久）

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

「コミュニティ」誌へのご意見をお聞かせ下さい

ご意見、ご感想等を800字前後にまとめ、当財団へ郵送いただくか、d1-foundation@dream.ocn.ne.jp にお送り下さい。

「読者の声」欄に掲載させていただいた方には、粗品を進呈いたします。

第106号	空港とコミュニティ	(94.5)	第154号	スポーツとコミュニティ	(15.5)
第107号★	祖父母と孫	(94.8)	第155号	農産物直売所の新しい動き	(15.11)
第108号	生活と時間	(94.11)	第156号	世代間交流	(16.5)
第109号	農村の暮らし	(95.2)	第157号	地域の中の保育園	(16.11)
第110号	雨・水・暮らし	(95.5)	第158号	地域の中の男女協働	(17.5)
第111号	地震災害とコミュニティ	(95.8)	第159号	当事者主体の地域福祉	(17.11)
第112号	コミュニティ 30年の歩み	(95.11)	第160号	地域の中のムスリム	(18.5)
第113号	都市防災とコミュニティ	(96.2)	第161号	土地の歴史とまちづくり	(18.11)
第114号	ペットを考える	(96.5)	第162号	「平成」から「令和」へーコミュニティはどう変わるか	(19.5)
第115号	女性とコミュニティ	(96.8)	第163号	日本の〈農〉を考えるー農業と地域社会	(19.11)
第116号	大学とコミュニティ	(96.11)	第164号	LGBTQ +の現在	(20.5)
第117号	通信メディアとコミュニティ	(97.2)	第165号	地域医療・看護・介護の現在と将来	(20.11)
第118号	今後の地域保健の課題	(97.5)	第166号	水と地域の暮らし	(21.5)
第119号	都市における死者の弔いかた	(97.11)	第167号	新型コロナを経た暮らしとコミュニティ	(21.11)
第120号	家庭科教育と今の社会	(98.2)	第168号	多様な人が共存する社会と家族のありかた	(22.5)
第121号	ごみ問題と自治体	(98.5)	第169号	農と食と地域を育てる	(22.11)
第122号	巨大ショッピングセンターと地元商店街	(98.11)	第170号	日本の在宅医療の現在と将来	(23.5)
第123号	子ども文庫とコミュニティ	(99.5)	第171号	ジェンダード・イノベーションとコミュニティ	(23.11)
第124号	住民によるまちづくり	(99.11)	第172号★	日本で暮らす外国人と地域社会	(24.5)
第125号	高齢社会と交通	(00.5)	第173号	教員養成と地域	(24.11)
第126号	子どもとコミュニティ	(00.11)	第174号	水害とコミュニティ	(25.5)
第127号	ホスピスとコミュニティ	(01.5)			
第128号	サウンドスケープとまちづくり	(01.11)			
第129号	戦後ニュータウンを見直す	(02.5)			
第130号	食生活の変化と家族	(02.11)			
第131号	地域で支える子育て	(03.5)			
第132号	農村地域の自立と住民参加	(03.11)			
第133号	家族はどうなるのか	(04.5)			
第134号	「ご近所」を見直す	(04.11)			
第135号	介護保険と介護予防	(05.5)			
第136号	わかりあえるコミュニティ	(05.11)			
第137号	墓とコミュニティ	(06.5)			
第138号	祭りとコミュニティ	(06.11)			
第139号	団塊世代とコミュニティ	(07.5)			
第140号	ミュージアムと地域社会	(07.11)			
第141号	景観とコミュニティ	(08.5)			
第142号	日本の医療と地域の力	(08.11)			
第143号	日本の親子の現在地	(09.5)			
第144号	地域メディアはコミュニティに何をもたらすのか	(09.11)			
第145号	水辺の環境文化とコミュニティ	(10.5)			
第146号	多文化共生を考える	(11.5)			
第147号	東日本大震災～農漁村の復興・再生・再構築～	(11.11)			
第148号	若者が見た東日本大震災	(12.5)			
第149号	災害に備える・コミュニティで備える	(12.11)			
第150号	出産と育児を支えるコミュニティ	(13.5)			
第151号	地域で担う在宅ケア	(13.11)			
第152号	新しいコミュニティをつくる地域の文化力	(14.5)			
第153号	人口減少社会とコミュニティ	(14.11)			

第1号	コミュニティのありかた	(64.5)	第53号	近所づきあいのコツ	(78.10)
第2号	新しい農村生活	(64.9)	第54号	手づくりの地域文化	(79.3)
第3号	地域社会と婦人	(64.11)	第55号	各国家族の新しい動き	(79.3)
第4号	都市生活とコミュニティ	(65.2)	第56号	コミュニティと土地利用	(79.10)
第5号★	家庭のしつけとコミュニティ	(65.6)	第57号	川とコミュニティ	(80.1)
第6号★	老人問題とコミュニティ	(65.9)	第58号	日本の高校生・アメリカの高校生	(80.3)
第7号	コミュニティと青少年	(65.12)	第59号	まちづくりの実験	(80.9)
第8号	日本人のつきあい	(66.3)	第60号	主婦と職業	(81.2)
第9号★	家族と親族	(66.8)	第61号★	コミュニティ・センターの評価	(81.3)
第10号	健全な子どもの育成	(66.12)	第62号	食料問題と農業のゆくえ	(81.10)
第11号★	今日の教育を考える	(67.3)	第63号	コミュニティと生涯教育	(82.1)
第12号★	レクリエーションとスポーツ	(67.4)	第64号	コミュニティと生活道路	(82.3)
第13号	健康なまち	(67.7)	第65号	新しい地域保健をめざして	(82.10)
第14号	交通安全とコミュニティ	(68.1)	第66号	夫の役割・妻の役割	(83.2)
第15号	日本人のことばと話し方	(68.3)	第67号	健康と食生活	(83.10)
第16号	テレビと家庭生活	(68.5)	第68号	子どもと教育	(83.11)
第17号	家庭婦人の学習	(68.10)	第69号	ことばと社会	(84.3)
第18号	公共の場におけるマナー	(69.2)	第70号	商店街	(84.3)
第19号	精神衛生	(69.3)	第71号	ある漁村社会の移りかわり	(84.6)
第20号	ヨーロッパを考える	(69.3)	第72号	集合住宅	(84.11)
第21号	公衆衛生	(70.2)	第73号	住みよい暮らし	(85.3)
第22号	千代田地区保健活動10年の総括	(70.3)	第74号	住区と施設	(85.8)
第23号	創造的農業者	(70.5)	第75号	昔の主婦と今の主婦	(85.11)
第24号	団地生活を考える	(70.8)	第76号	東アジアの家族問題	(86.2)
第25号	食生活を考える	(70.10)	第77号	少年非行	(86.7)
第26号	日本人の暮しと住まい	(71.1)	第78号	東アジアの地域社会	(86.10)
第27号	地方都市とコミュニティ	(71.4)	第79号★	町内会	(87.2)
第28号	わがコミュニティ	(71.10)	第80号	日米コミュニケーション考	(88.2)
第29号	家族はこれからどうなるか	(71.12)	第81号	三つ子の魂百まで	(88.3)
第30号	自然と人間	(72.3)	第82号★	ササニシキの村に生きて	(88.4)
第31号	子どもの遊び場	(72.5)	第83号	むらづくり	(88.7)
第32号	コミュニティと広場	(72.7)	第84号	都市化と寿命	(88.11)
第33号	乗物と人間	(72.8)	第85号	国際化と日本語	(89.2)
第34号	ことわざとコミュニティ	(72.10)	第86号	企業と地域社会	(89.5)
第35号	主婦の生活時間	(73.1)	第87号	都市とお墓	(89.8)
第36号	おやじの座を語る	(73.7)	第88号	退職者の暮らし	(89.11)
第37号	社会と健康	(74.1)	第89号	科学と暮らし—21世紀への展望	(90.2)
第38号	災害とコミュニティ	(74.5)	第90号	ディズニールランドのまち	(90.5)
第39号	日本の青年	(74.6)	第91号★	お年寄りの人間関係	(90.8)
第40号★	コミュニティ—10年	(75.1)	第92号	地方紙の時代	(90.11)
第41号	民話とコミュニティ	(75.2)	第93号	お年寄りの使いやすい品物	(91.2)
第42号	余暇とコミュニティ	(75.4)	第94号	日・中・韓の家族とコミュニティ	(91.5)
第43号	CATVとコミュニティ	(75.10)	第95号	公共トイレを考える	(91.8)
第44号	ゴミを語る	(76.3)	第96号	市民農園	(91.11)
第45号	社会福祉の国際比較	(76.6)	第97号	現代結婚考	(92.2)
第46号	親族問題の諸相	(76.10)	第98号	青年会議所	(92.5)
第47号	わがまち—その財政	(77.1)	第99号	小学生	(92.8)
第48号	保健・福祉とコミュニティ・オーガニ ゼーション	(77.3)	第100号★	日本のコミュニティ	(92.11)
第49号★	企業とコミュニティ	(77.9)	第101号	人にやさしいまちづくり	(93.2)
第50号	人間の居住環境とコミュニティ	(77.11)	第102号	生涯築集	(93.5)
第51号	身のまわりの安全	(78.3)	第103号	花と暮らし	(93.8)
第52号	山村女性の生活変動	(78.5)	第104号	外国人	(93.11)
			第105号	超高層住宅の暮らし	(94.2)

湯沢雍彦（お茶の水女子大学名誉教授）	ター研究所)
<p>(23)「地域を基盤とした高齢者保健医療福祉サービスの統合のあり方に関する研究」(2008.4) 代表：米林喜男（新潟医療福祉大学副学長）</p>	<p>(33)「子育て・子育ての地域援助システムの研究—ジェネラティビティに関するインタビュー調査から—」(2018.4) 代表：加藤邦子（川口短期大学）</p>
<p>(24)「高流動性社会を背景とした農村への人口流入と新たな『場所性』の構築プロセスに関する研究」(2009.9) 代表：後藤春彦（早稲田大学）</p>	<p>(34)「北アフリカにおける福祉とコミュニティー・チュニジアを中心に—」(2020.1) 代表：岩崎えり奈（上智大学）</p>
<p>(25)「日韓比較からみる青少年の社会化環境」(2011.6) 代表：渡辺秀樹（慶應義塾大学）</p>	<p>(35)「『はざま』を『あいだ』に組み換える—想像力と配慮による当事者形成のプロセスを考える—」(2021.6) 牧野篤（東京大学）</p>
<p>(26)「地域の特性を生かした子育て支援と保育のあり方の研究—ある地方都市の家庭・地域環境を事例として—」(2011.7) 代表：牧野カツコ（お茶の水女子大学）</p>	<p>(36)「就学前施設の整備プロセスにおける課題について」(2021.10) 代表：小池孝子（東京家政学院大学）</p>
<p>(27)「長寿社会の地域力と健康—高齢者と介護者の健康に着目して—」(2012.5) 代表：甲斐一郎（東京大学大学院）</p>	<p>(37)「園における戸外・地域活用の実態と意識に関する調査研究—コロナ前後の変化に注目して—」(2022.5) 代表：宮田まり子（白梅学園大学）</p>
<p>(28)「農村コミュニティ変貌と資源管理・協同組織—」(2013.11) 代表：生源寺眞一（名古屋大学大学院）</p>	<p>(38)「高校入学者選抜システムの地域間比較：その教育的・社会的影響の多様な在り方に関する社会学的研究」(2023.6) 代表：中村高康（東京大学）</p>
<p>(29)「法律婚をこえた共同性とケアの実践—事実婚と同棲の事例からみる家族の現在—」(2014.5) 代表：松木洋人（東京福祉大学）</p>	<p>(39)「戸外保育での『持続可能性』に向けた実践に関する調査研究」(2024.6) 代表：辻谷真知子（お茶の水女子大学）</p>
<p>(30)「保育・教育方針からみた保育施設の空間・環境の計画に関する研究」(2015.11) 代表：定行まり子（日本女子大学）</p>	<p>(40)「家事・育児・仕事時間のジェンダー間格差に関する研究—在宅勤務の効果に着目して」(2025.6) 代表：西村純子（お茶の水女子大学）</p>
<p>(31)「男性の育児参加を促進する要因—育児休業取得者へのヒアリングから見えてくること—」(2016.5) 代表：石井クンツ昌子（お茶の水女子大学大学院）</p>	<p>*市販はいたしておりませんので、ご希望の方は当財団へ直接お申し込みください（送料実費）。</p>
<p>(32)「在宅家族介護者を支える地域介護支援ネットワーク醸成に関する研究」(2017.12) 代表：涌井智子（東京都健康長寿医療セン</p>	

「調査研究報告書」 頒価 2,000 円

(1)「浦安市舞浜地域開発の影響調査」
(1989.6)
浦安地域環境研究会（代表：米林喜男）

★(2)「都市化と寿命に関する研究—東京と大阪府の比較を中心に—」(1989)
保健医療社会学研究会（代表：園田恭一）

★(3)「高齢者居住施設の改善方策に関する検討」(1992.8)
林千代（淑徳短期大学）

★(4)「高齢者が快適に暮らせる社会施設の条件の調査研究」(1992.11)
商品科学研究所（代表：三枝佐枝子）

(5)「日本人口の高齢化とその要因の変化—国勢調査結果を中心として—」(1994.5)
山口喜一（東京家政学院大学）

★(6) 育児書内容の国際比較分析—日米英仏中五ヶ国の育児観—（1994.6）
代表：加藤恭子（上智大学）

★(7)「首都圏におけるマンションライフ—その快適な住まい方を探る—」(1995.10)
商品科学研究所（代表：藤原房子）

(8)『『日本におけるハビタット学会』の経過と『国際都市理論の展開』』(1996.3)
磯村英一（日本ハビタット学会会長）

(9)「戦時女高師卒業者のライフコース—教育と戦争の影響を中心に—」(1996.3)
湯沢雍彦（お茶の水女子大学）他

(10)「シニア男性のカジュアルウェアの調査研究—若く活動的に過ごすために—」(1996.9)
商品科学研究所（代表：藤原房子）

(11)「中山道上州路の庶民信仰と地域社会」(1996.9)
代表：谷沢明（愛知淑徳大学）

(12)「生涯スポーツの選好に関する研究—コミュニティと運動文化およびライフコー

スにおける運動選択に関する調査研究報告書—」(1996.10)
代表：伊藤滋（㈱プレジャー研究所代表取締役）

(13)「第2回ハビタット会議レポート（1996年6月イスタンブール）」(1996.11)
磯村英一編（日本ハビタット学会会長）

(14)「アメリカにおけるエイジングにともなう諸問題—第一部 意識調査—」(1996.11)
加藤恭子（上智大学コミュニティカレッジ講師）

(15)「アメリカにおけるエイジングにともなう諸問題—第二部 経済状態と健康度からみた住居選択の中について—」(1997.5)
加藤恭子（上智大学コミュニティカレッジ講師）

★(16)「食卓の風景—食事マナーの国際比較—」(1997.8)
加藤恭子（上智大学コミュニティカレッジ講師他）／比企寿美子（エッセイスト）

★(17)「地域社会におけるマナー意識とマナー行動の研究」(1998.10)
代表：牧野カツコ（お茶の水女子大学）

(18)「養子・里親斡旋問題の再検討と改革の提言」(1999.3)
代表：湯沢雍彦（郡山女子大学）

(19)「新潟県における大学＝地域交流—国立と私立の比較分析—」(2000.7)
代表：天野郁夫（国立学校財務センター）

(20)「ボランティア活動と新しいコミュニティ形成の日米比較」(2000.12)
代表：園田恭一（東洋大学）

(21)「補助金とコミュニティ」(2002.3)
加藤秀俊（国際交流基金日本語国際センター所長）

(22)「家族のゆくえ—むかし・いま・これから—」(2008.3)

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された一般財団法人都市のしくみとくらし研究所、一般財団法人地域社会研究所および一般財団法人姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し、発足した一般財団法人です。当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。

【理事長】

渡邊光一郎

第一生命保険株式会社特別顧問

【常務理事】

北奥 郁代

(元) 第一フロンティア生命保険株式会社フェロー

【理事】

青木 和夫

日本大学名誉教授

大村謙二郎

筑波大学名誉教授

甲斐 一郎

東京大学名誉教授

後藤 春彦

早稲田大学副総長・教授

定行まり子

日本女子大学名誉教授

陣内 秀信

法政大学名誉教授

隅野 俊亮

第一生命保険株式会社代表取締役社長

野原 裕

獨協医科大学名誉教授

渡辺 秀樹

慶應義塾大学名誉教授

【監事】

佐藤 滋

早稲田大学名誉教授

若山 吉史

第一生命保険株式会社常任監査役

【評議員】

秋田喜代美

学習院大学教授・東京大学名誉教授

石井クンツ昌子

お茶の水女子大学理事・副学長

稲垣 精二

第一生命保険株式会社取締役会長

小笠原清基

特定非営利活動法人小笠原流・小笠原教場理事長

生源寺眞一

東京大学・福島大学名誉教授

服部万里子

服部メデイカル研究所所長

菱田 真

第一生命保険株式会社執行役員

牧内 克司

第一生命保険株式会社執行役員

松本 守雄

慶應義塾大学病院病院長

松本 康

大妻女子大学特任教授

横張 真

東京大学総括プロジェクト機構特任教授

【顧問】

天野 郁夫

東京大学名誉教授

井手 久登

東京大学名誉教授

荏開津典生

東京大学名誉教授

戸沼 幸市

早稲田大学名誉教授